



紀伊國名所圖會

後編 一之卷  
若山補遺

ル 4  
325  
18



ル  
325  
18

紀伊國名所圖會後編

若山補遺

紀伊國名所圖會後編

紀伊國名所圖會後編

紀伊國名所圖會後編

紀伊國名所圖會後編

紀伊國名所圖會後編



心持用入  
色々  
心持用入  
色々  
心持用入  
色々  
心持用入  
色々

心持用入  
色々  
心持用入  
色々  
心持用入  
色々  
心持用入  
色々

人 物 遠  
如 納 結 子  
音 用 留  
物 留 大 院

同 一 一 一  
一 一 一 一  
一 一 一 一  
一 一 一 一

西漢の大殷勤廣

有為の事

日

の

今

大

備

大

大

大

毎  
書  
負  
安  
と

字  
属  
及  
字  
属  
指

明神宗御製  
 紀伊國造紀朝長

弘化子丸月

紀伊國造紀朝長

紀伊名所圖會後編卷之一

目錄 若山補遺

古印 <small>并解文</small>	山口驛圖	府城	本町御門
宇治宅子故居	惺窩翁客地	粕漬	廣小路圖
新屋酒店圖 <small>并粕漬製圖</small>	駿河屋店圖 <small>并本字饅頭</small>	納屋河岸圖	京橋
鈴木孫市故居	釘貫里	昌平河岸文	鍛冶戸
雜賀鉢	其二	學習館全圖 <small>并柳樹</small>	同夜店圖
正住寺	湊築地 <small>同圖</small>	漁者	醫學館圖
牛舌餅投圖	簾具 <small>并圖</small>	吹上古館記 <small>櫻樹</small>	鮎
吹上御門邊圖	鶴溪圖 <small>并檜椿全圖</small>	扇の芝圖 <small>并文</small>	大手御門邊圖
吹上冠木御門	追廻口圖	城池鯉圖	御舞臺
高石垣畧圖	岡口御門邊圖	和歌道 <small>并圖</small>	堂形圖

無量光寺 車坂稻荷社 并園  
 日前宮除夜詣圖 并說  
 田中蜜柑市并園

淺草文庫  
 土井呉服店圖 呉五官肖像  
 熊野路一里塚

紀伊國印



此印天平二年本國の解文に押あり  
 三編の巻首に載る仁壽四年の  
 國印よりハヤ、古く印中の文字も異  
 なれ、更ニ摸寫せり、其解の逸  
 文も因ニ下小載せて古の制度を  
 考ふべき一端、本書ハ東大寺の  
 勅封庫にありと也

紀伊國司解	申天平二年收納大稅并神稅事
合七郡天平元年定大稅稻穀肆萬伍仟貳佰捌拾柒斛貳斗叁升伍合	
不動貳萬伍仟貳拾壹斛玖斗玖升柒合捌分	
動貳萬貳佰陸拾伍斛貳斗叁升柒合貳分	
粟穀叁拾斛伍升	
類稻柒萬捌仟壹佰肆拾捌束壹把陸分	
為穀古類柒仟玖佰伍拾束	
得穀柒陌玖拾伍斛	
振斛量入柒拾貳斛貳斗柒升貳合陸分	
出舉壹萬陸仟壹佰捌拾束	



身死壹佰叁人免稅叁所壹拾陸束

定納本壹萬叁所壹佰陸拾肆束

利陸所伍佰捌拾貳束

古類伍萬肆所壹拾捌束壹把陸分

合陸萬叁所柒佰陸拾肆束壹把陸分

雜用捌所陸拾束

年折白米叁佰柒拾壹斛肆斗折柒所肆佰貳拾捌束

酒米貳拾捌斛陸斗折伍佰柒拾貳束

年折外交易進上小麦陸斛 直陸拾束 一斛別一十束

遺陸萬伍所柒佰肆束壹把陸分

輸田租稻穀肆拾斛玖斗玖升柒合

全給貳所封主貳佰叁拾壹斛叁斗貳升壹合

貳分壹主給玖拾玖斛壹斗伍合伍分

納官玖拾玖斛壹斗伍合伍分

納公叁所柒佰壹拾斛伍斗柒升伍分

振斛量入叁佰叁拾柒斛叁斗貳升肆合貳分

定叁所叁佰柒拾叁斛貳斗肆升陸合叁分

依民部省天平二年八月廿八日符加添輕稅錢直稻叁所

柒佰貳拾肆束柒把

都合見定稻穀肆萬玖所叁佰捌拾叁斛貳斗捌合柒分

不動貳萬伍所貳拾壹斛玖斗玖升柒合捌分

動貳萬肆所叁佰陸拾壹斛貳斗壹升玖分

粟穀叁拾斛伍升

類稻陸萬玖所肆佰貳拾捌束捌把陸分

酒伍斛陸斗

清四斛  
洋一斛六斗

正倉改拾間

空七間 借納郡稻一十間  
借納官奴婢食新稅四間

借納公用稻一間 借納義倉粟二間

穀倉肆拾間

不動二十九間  
動廿一間

粟穀倉壹間

類倉貳拾肆間

鎰壹拾伍勾

不動六勾  
動九勾

軍團糶

天平元年定糶壹伯玖拾壹斛捌斗貳升壹合

以下畧

志願(セ)神代の(り)此

ありて(然)將乃(ち)く(と)

竹(葉)の(り)て(り)て(り)て

加納諸平

齋部宿林孝秀書

山口驛より遙し  
御城を望む圖

家集

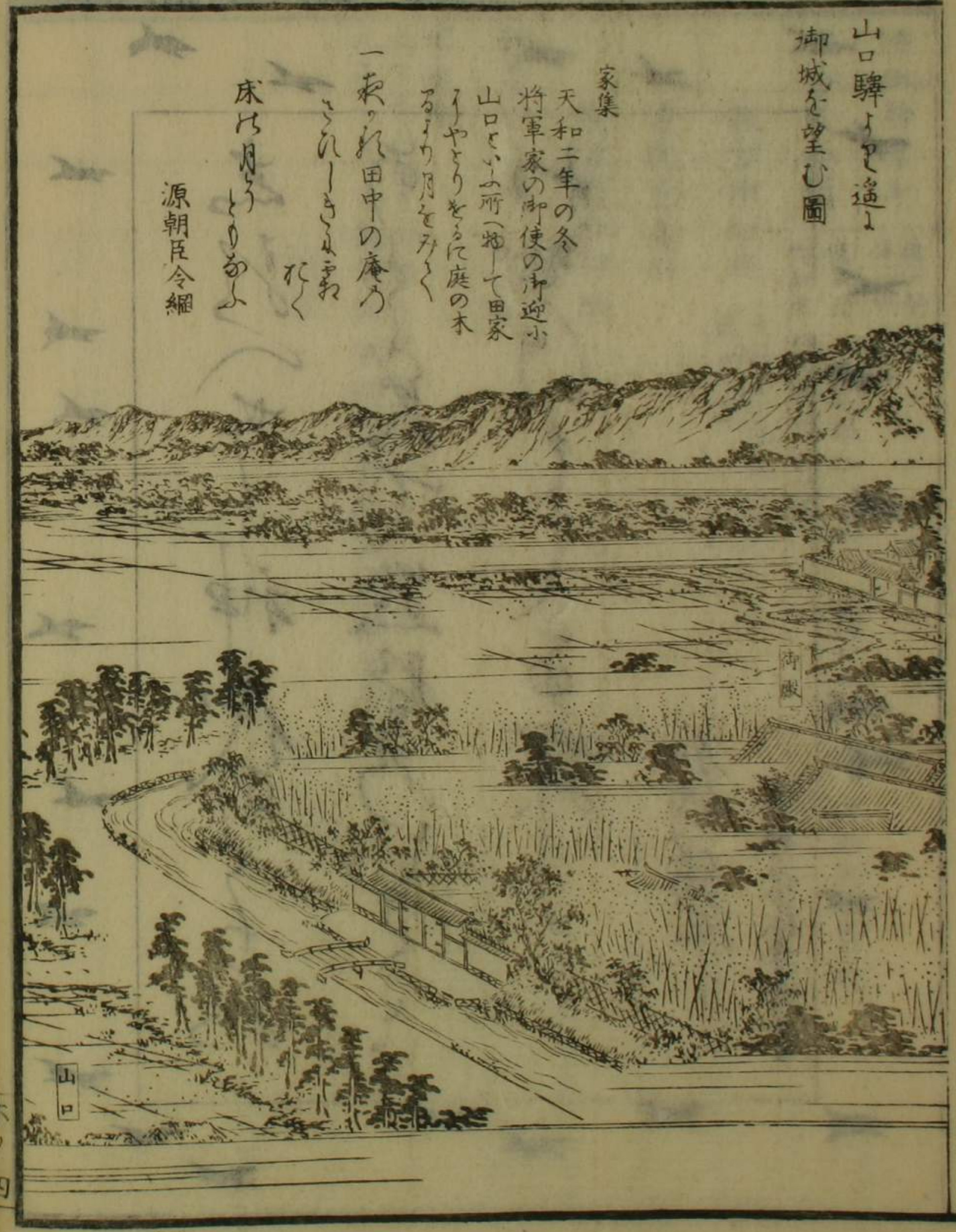
天和二年の冬  
將軍家の御使の御迎ふ  
山口といふ所(指して田家  
イ)やとりをくらに庭の木  
るより月をみく

一夜の田中の庵の

さしきしきまわ  
れく

床は月よりあふ

源朝臣令細



山口  
四

幾樹青松夾路堆  
遙看城堞樹間開  
沙川溶漾人呼渡  
此水知從芳野來  
頼山陽

萩園家集

山口崎より

雄の山は

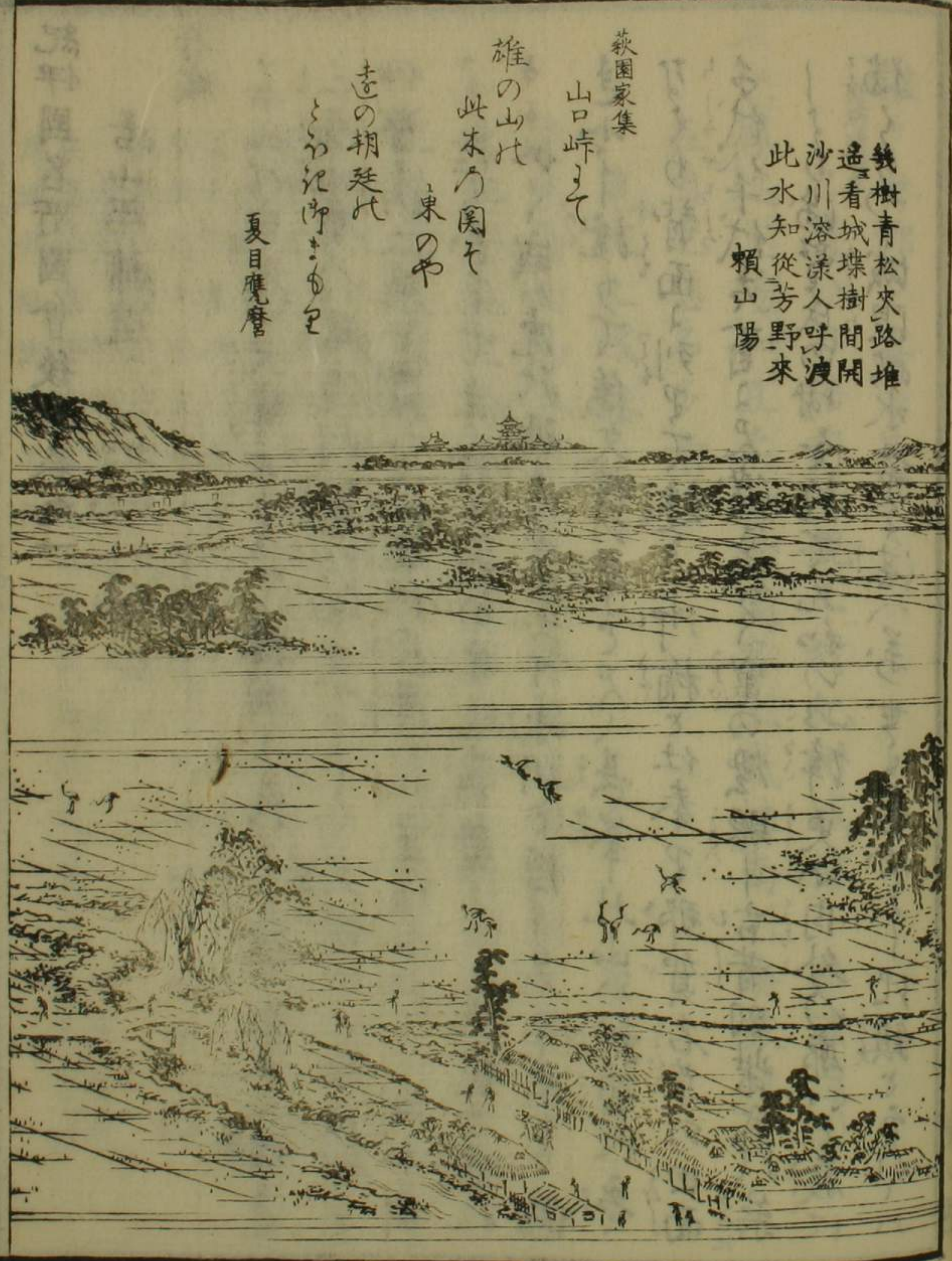
此木の園を

東のや

寺の朝廷は

とわは御まもを

夏目麿磨



紀伊國名所圖會後編卷之一

若山部補遺

府城

若山此中央小天聳きまらて樓閣うろく、那多日曜き  
 三層四層乃殿造利麗いやうふ、大城のうを紀伊と  
 伊勢との二國を覆へり四面此内廓ハ八重垣を那、岡山南  
 へはらふりて幸絶ふ松の木立翁鬱、或ハ龍の蟠れ  
 るめく或ハ虎の踞まき、如く木川とほ、久く東より流  
 きやう、滝りて倭文機の帯とんく長峯北山ハ新面に雪  
 なりり北面より列りて遠き沖楯と仕奉り、那賀名草の田面  
 千代八千代を一目より渡されく、電の燈眼、古昔羽柴氏代榮  
 けり、那賀氏の町を控えて元和の以降更ハ内外の廓、と殿に  
 備りりつ、城隍水常、湛、糸世、易、ゆ、比鎮とる、ハ

誰より、作き、尊とる、

清所遺業

九月八日陪前法親王於紀州城樓 那波道山

風迹重陽和且柔青雲高客上城樓南州海嶽隨看

在自是應名多景樓

扈從上城樓

菊地衝岳

宗室藩封跨二州三層突聳鎮城樓勢南表裏山河

色紀水迢遙海嶽秋天險寧論吳子對雄風欲賦楚

王遊追隨遠指高陵樹瑞靄氤氳繞玉洲

雨餘草色夏夜當直城樓之韻、樓、半、樓、月、掛、嶺、頭、蟾、影

動雲晴林上挂香浮清風吹樹偏忘暑白露橫江忽

占秋窓對葛城情自逸戶舍紀水望愈悠柳堤陰步

去來客兼渚留連遠近舟世上塵喧堪可謝人間富

貴復何求習家醉飲尋彙趣河朔涼筵結雅遊不識

誰家絃管起依稀使我在瀛州 伊藤善詔

宗藩治國紀候謹賦拙詩一章 澤洽民况有遺文常社

席進修抵識逐年新 奕世恩光澤洽民况有遺文常社

殿の御前よりさきもつゝいへり古語拾遺をよみて申せり  
日前大神乃由りて此所をよみしをみたりと申す  
うしこけきとおひつゝなまりまは 本居宣長

朝より此の大神此國の殿乃に大神の神代此道をお  
もはるる事給ふと其御書お記らる給ふ此心此あや  
きき大神をめでの事まもりておのり日の守護も亦た  
よきまもり給ふ大神一実此の守護よきまもり日代も  
しるる事給ふ守り給ふ國より大神後威の光四回八  
いふくもく照給ひりやき給ひ萬世いやき長久廣  
くやうきさのんふるる殿の御世もや

本町御門

府下の入口より御門より内を本町といふ元和  
年中京橋御門のやう通衢を開きて本町寺

庚寅元日 南紀作

那波木菴

新年何所好 白日已徐長 酒宿北京客 梅飄南國香

江山催淑氣 氷雪逼青陽 莫謂非吾土 委身是故郷

元日の朝世のいひこゝして大平の我の茶をまじりて  
君のそと名もあはれおののちをまじりてしるる事  
のいひこゝをよらるるはききて我も又より

本居宣長

野高

本町の東にあるを東宇治  
と西にあるを西宇治とす

今年をりて此初めと名も若山此里のわ水

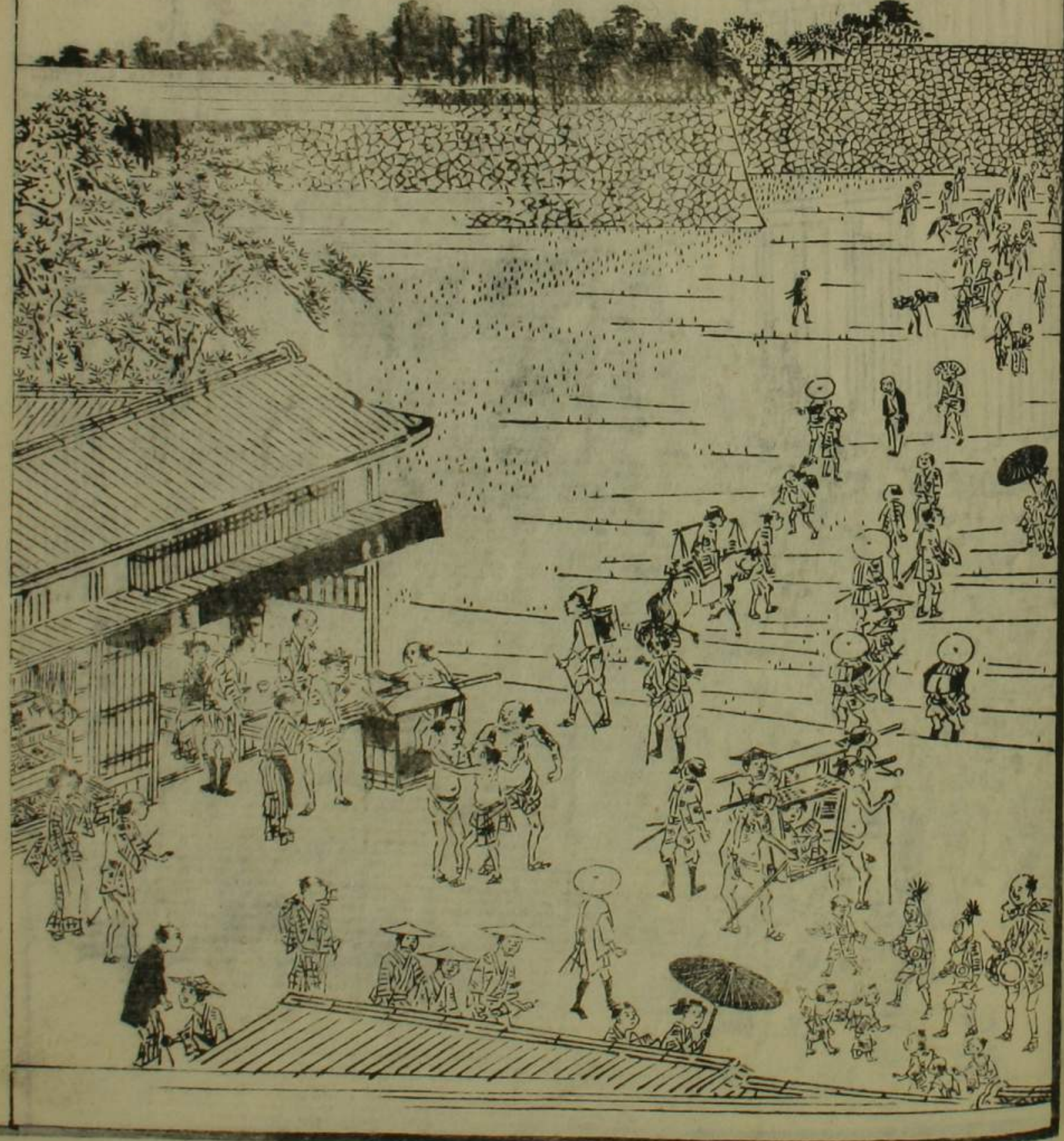
宇治の名日本紀より紀直祖免道彦雲異記小宇治大伴連小  
の名皆此地名より出て上古此邊の總名なりし後世分  
れて鷺森七日市六日市此三村となり釘貫徳田木四日  
市等の小名ありし  
ひうし佐武伊賀守といふ人あり其父を元昌といふ  
室町家佐々木永祿年中軍功ありて鷺森釘貫  
の地二十石賜ふといふ 慶長此の宇治村鷺森村と二村よりなりし其後  
府下小属し二村此地を割て内町を商戸とす 宇治を  
士邸といふ

日本靈異記云

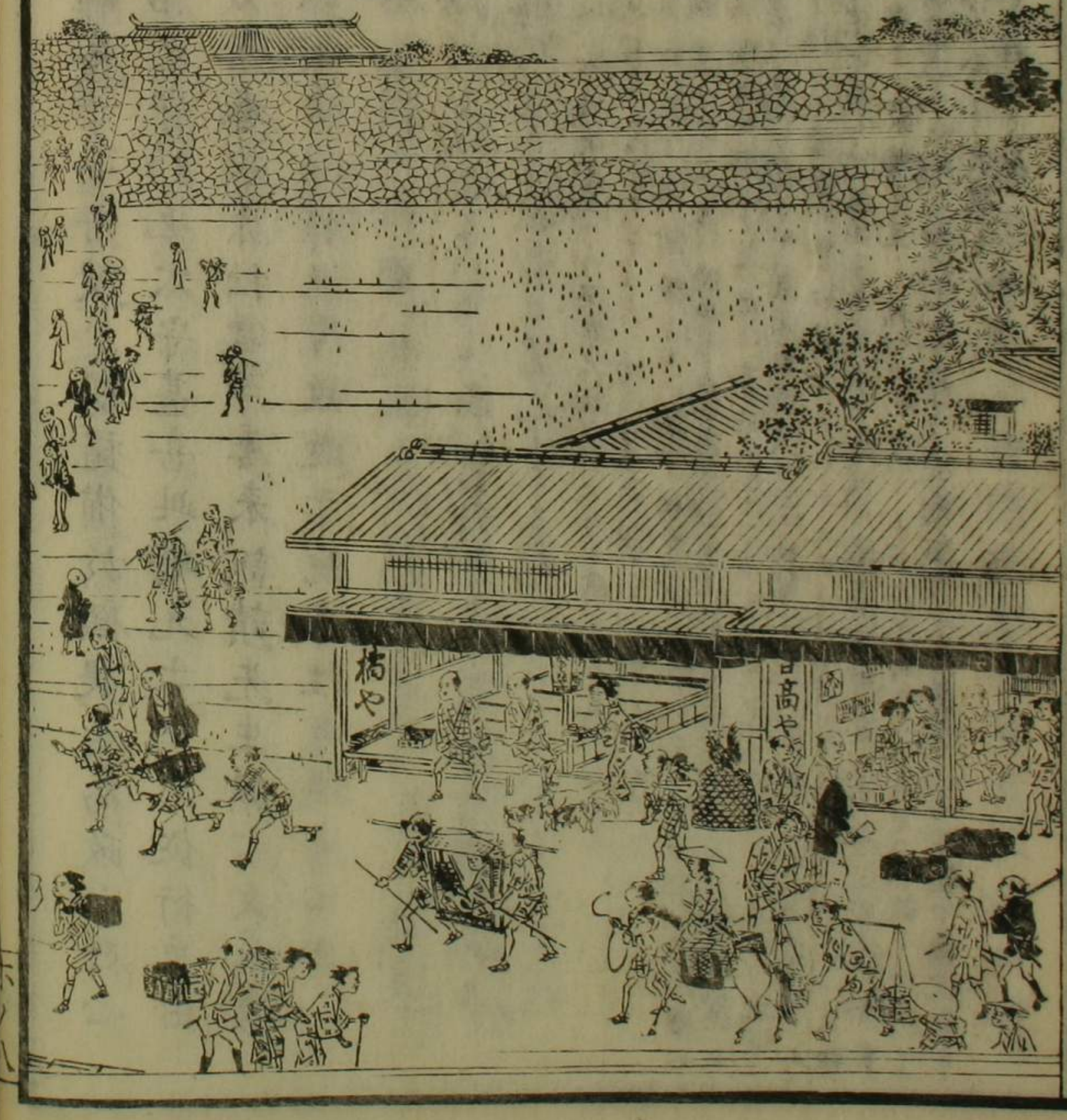
大花上 大部屋 柵野古 連公者 紀伊國名草郡宇治

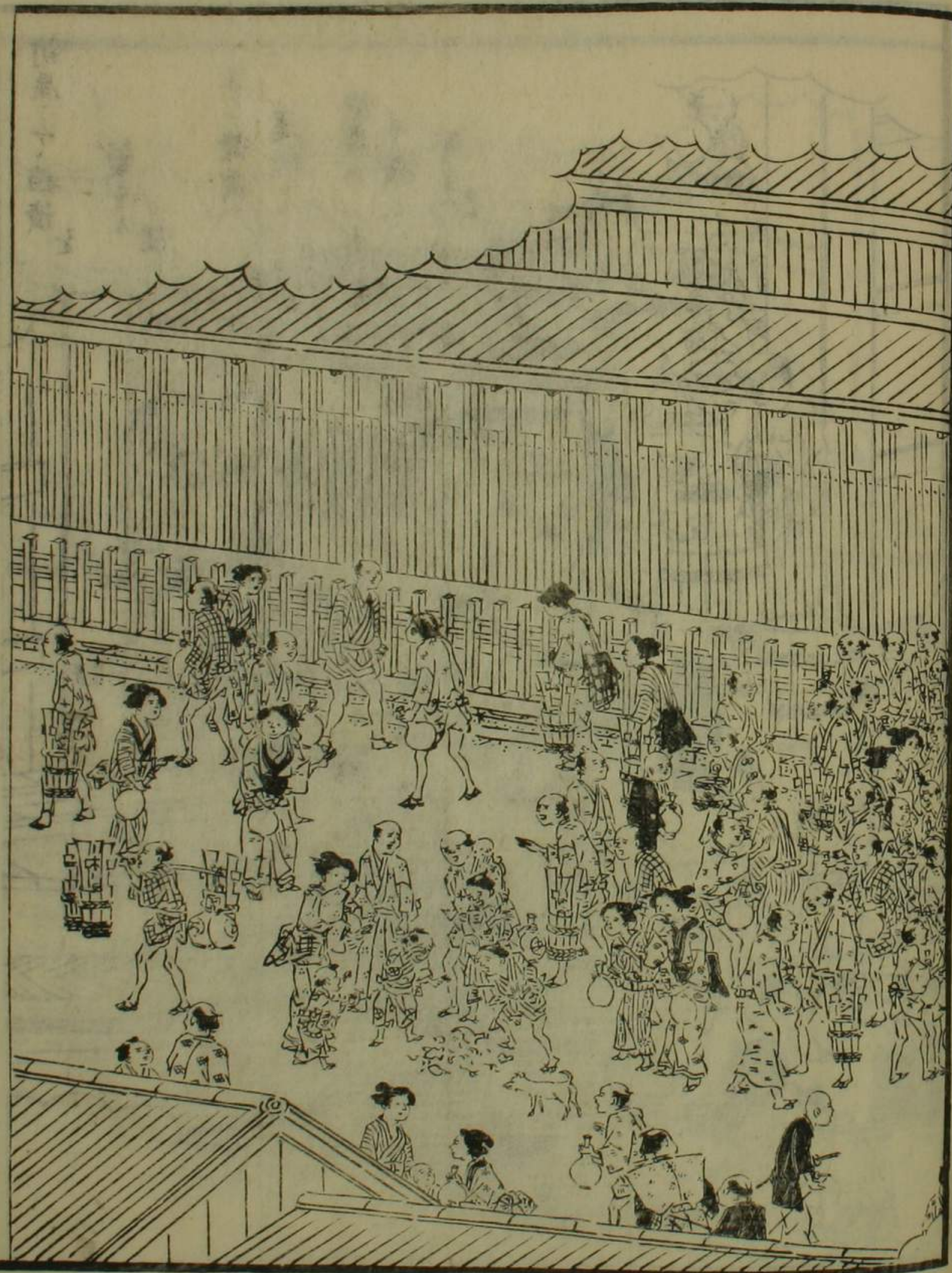


辛夷元日  
 一任年々  
 傍花隨柳  
 養吾真  
 南州民物  
 百應喜  
 和暖先占  
 天下春  
 李立卓



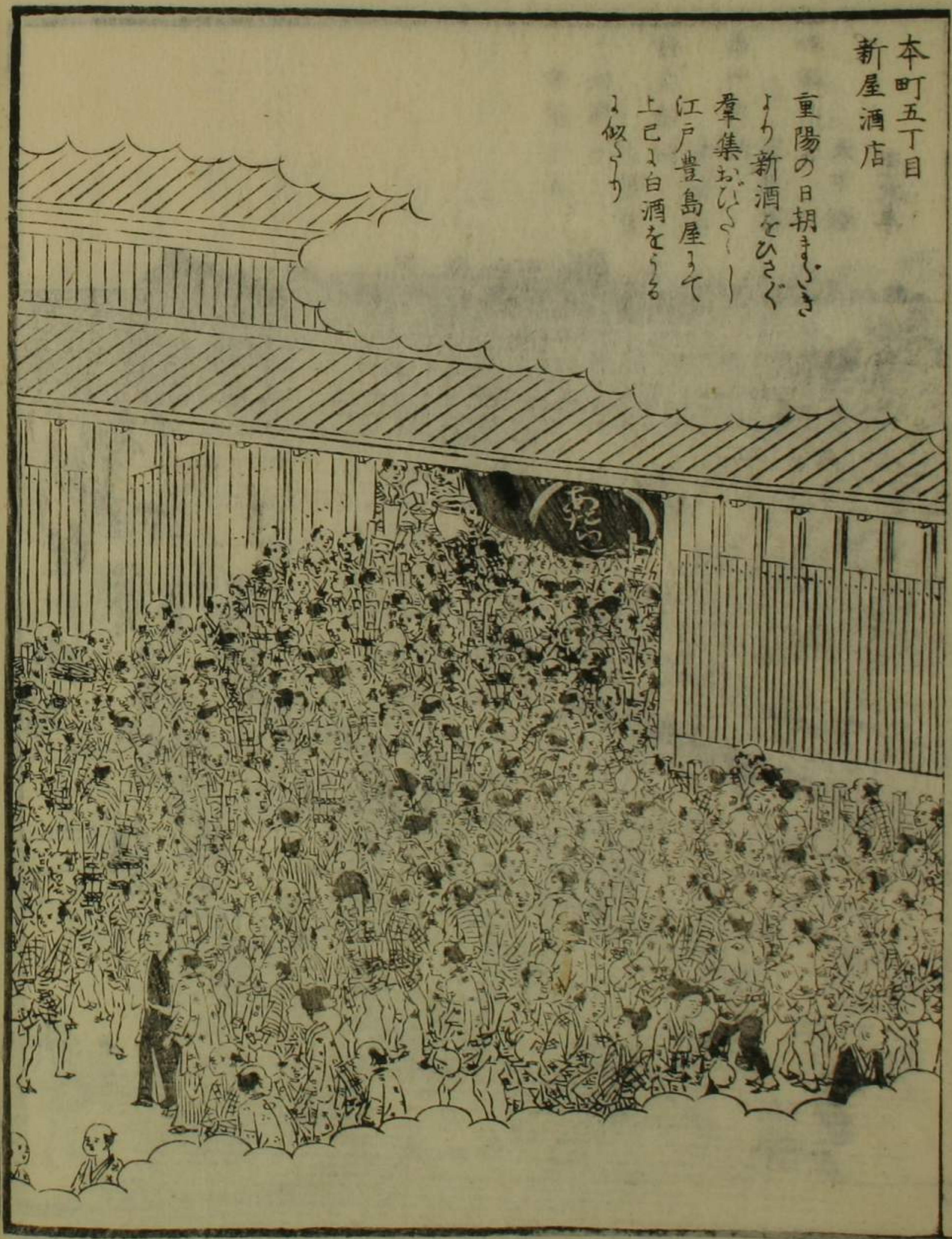
本町御門の外  
 廣小路乃番



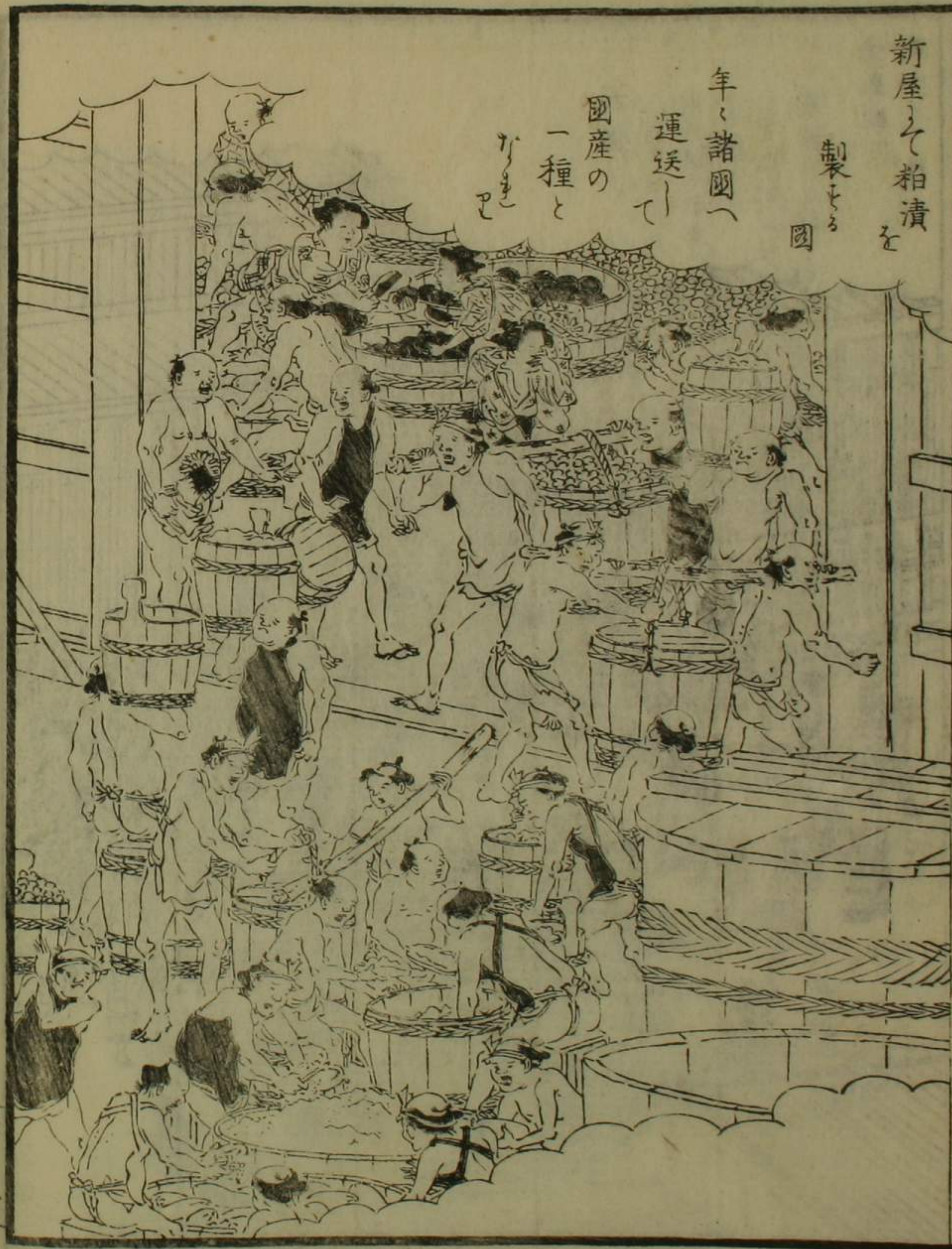
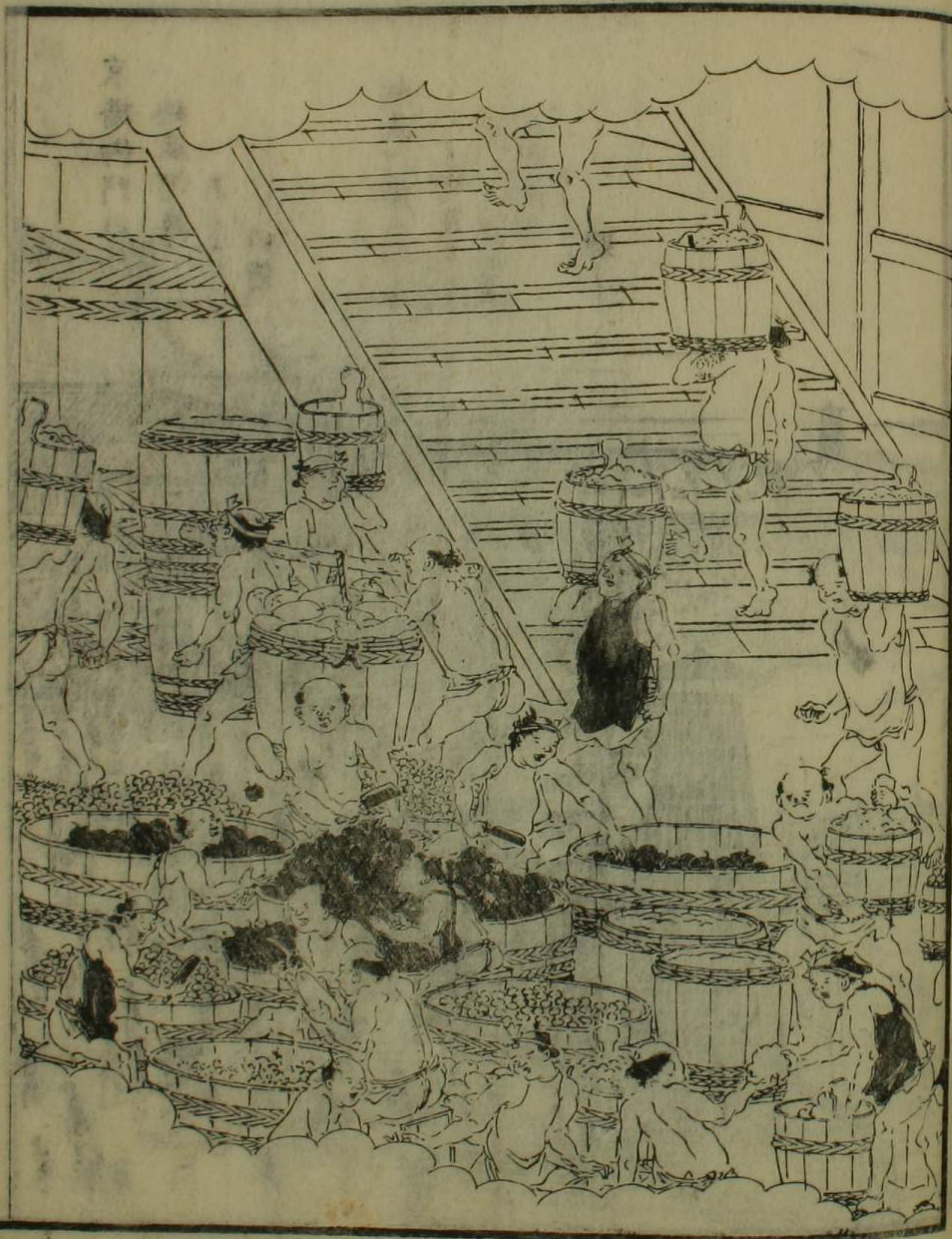


本町五丁目  
新屋酒店

重陽の日朝まじき  
より新酒をひさぐ  
羣集おひさぐ  
江戸豊島屋まで  
上巳の白酒をうる  
ふ似しり







新屋にて粕漬を

製する

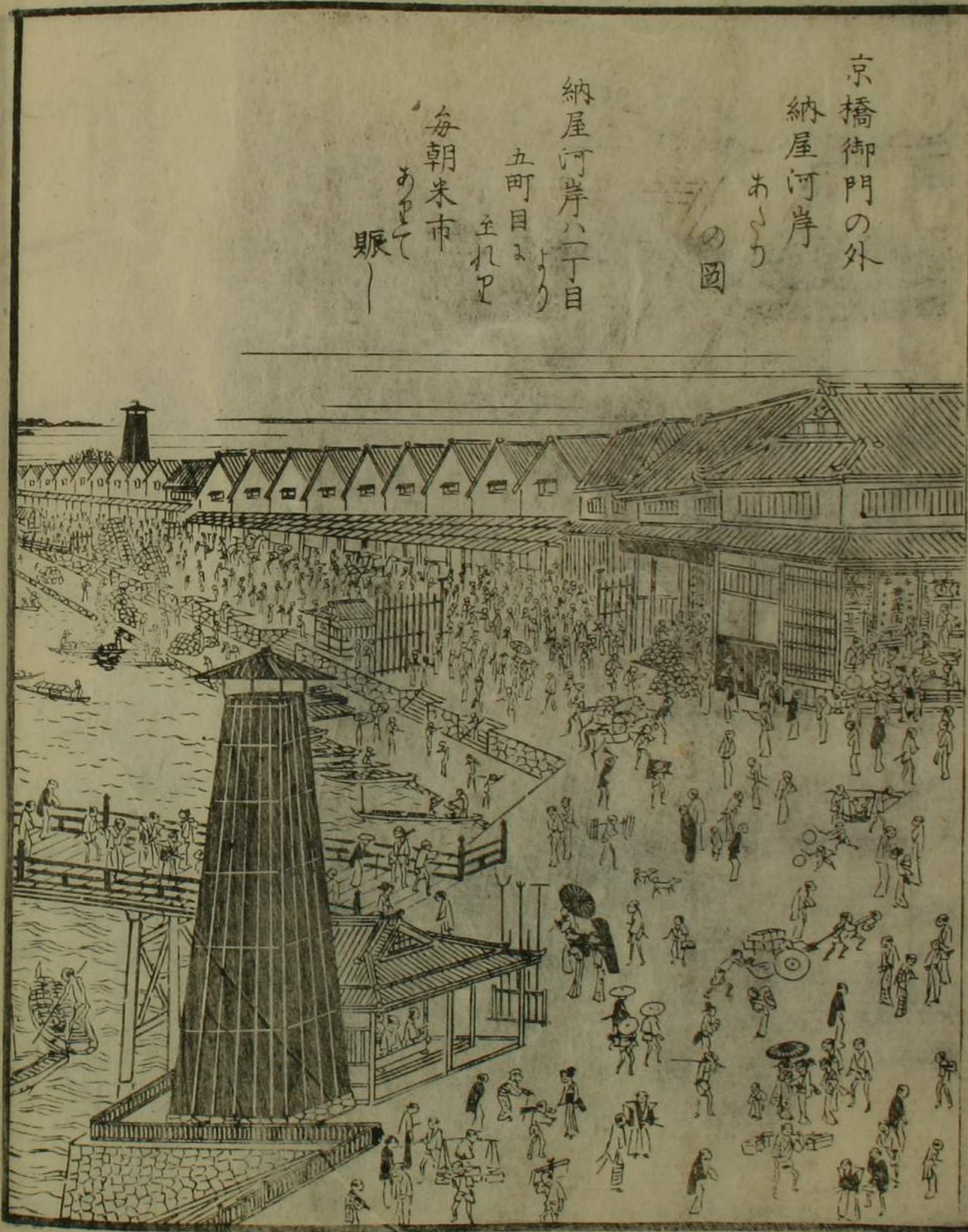
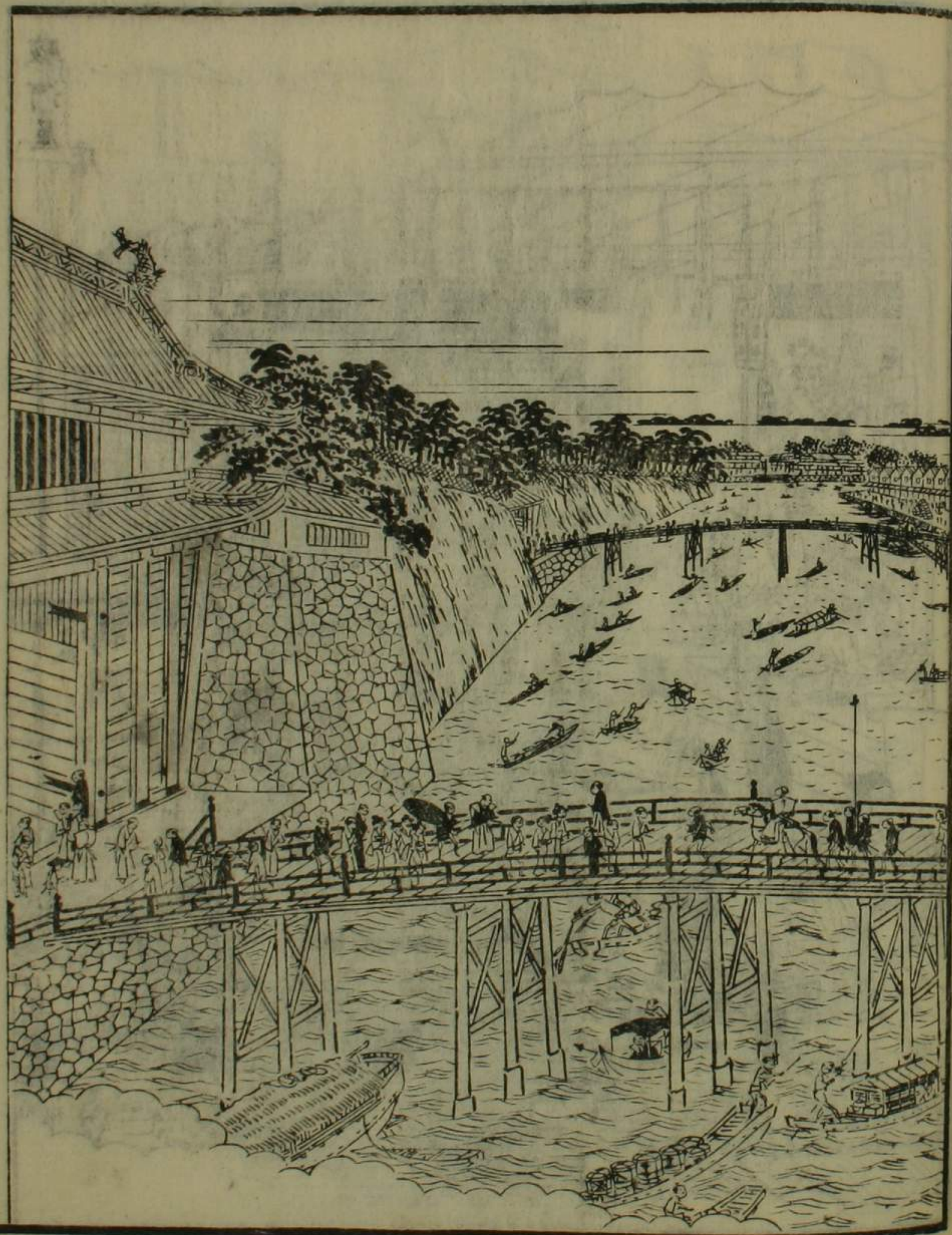
年々諸國へ

運送して

國産の

一種と

がま



京橋御門の外  
納屋河岸

あしり

の図

納屋河岸八丁目

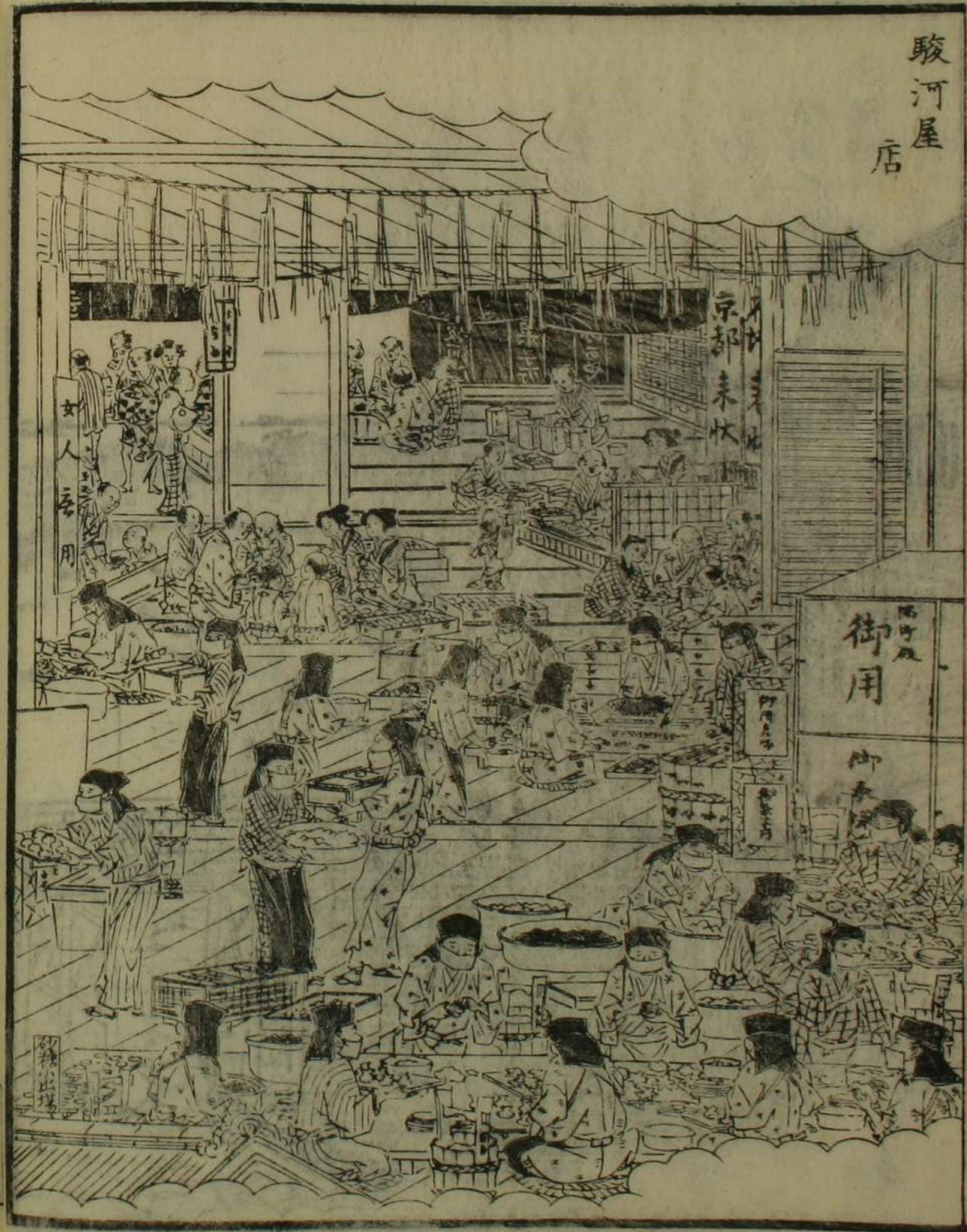
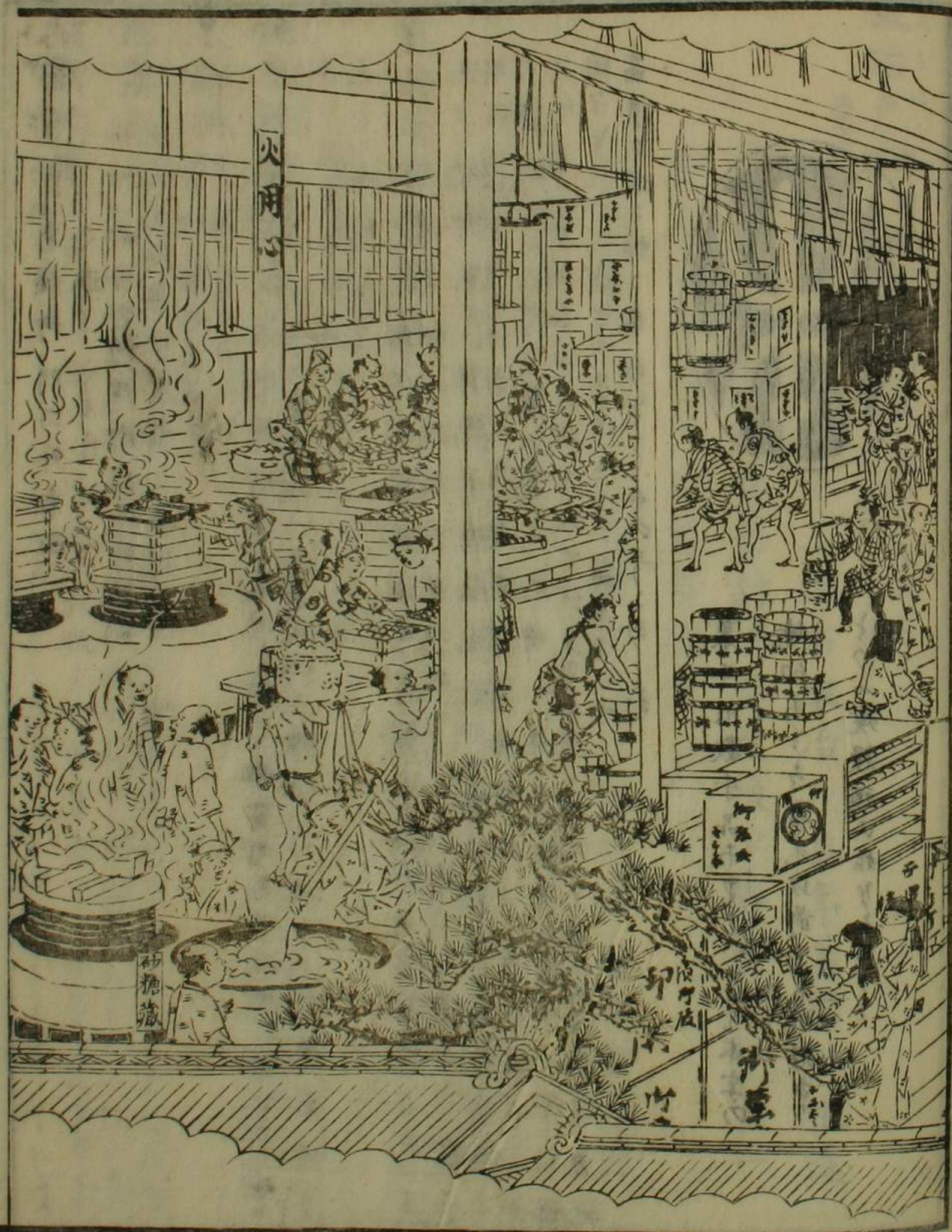
五町目

五れ

毎朝米市

あして

販



駿河屋  
店

納屋河岸

京橋御門の外東西  
小通一丁目

京橋

本町一丁目目の河岸御門の前面  
架以元和年中京橋と名けり

京橋御門

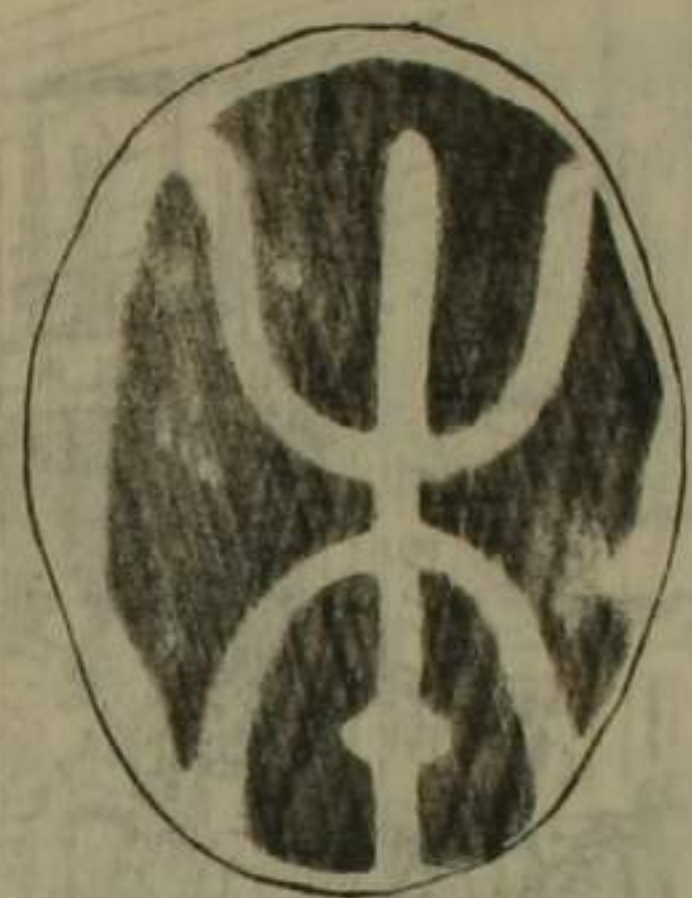
内郭の正面の御門をいふ

鈴木孫市故居

京橋御門の東川に傍て雜賀町ありて此地に住せり  
高し其裔今水府  
家ありありわたり

産物本字饅頭

駿河町駿河屋にて製も當家氏を固本といふ其  
祖山城國伏見の産物古来より菓子の製を  
傳て搦紳家より調進も慶長元和の比屢命ありて駿河國  
轉居り又若山小出店も其後京大坂南都名古屋より出店し今  
六箇所に分れて同製を賣ぐ天明四年より伏見の店小出店を賜  
ひて今小及び台命の故を以て伏見を本店といふも若山の此店官用施  
向がきれハ尤盛なり屋号もハ齋屋といふ  
高貴の名に憚り事あり今号あり



菓子形数千品ありて本字の  
焼印ありて慶元以前より形あり  
といふ焼饅頭の始りなり

鍛冶戸

本國鍛冶の事古書に見ゆるを因りて  
載す今東西鍛冶屋町あり各郡にも入る

延喜式  
鍛冶戸紀伊國十三畑右鍛冶戸毎年當國計帳進

官官先下主計寮全計損益然後下寮即從十月一

日至二月三十日爲番役使

九五畿内 紀伊等國鍛冶戸百姓調庸徭分者附

眞調送之

續日本紀  
養老六年三月紀伊國韓鍛冶杵田鎧作名床等合

七十一戸雖姓涉雜工而尋要本源元來不預雜戸

之邑因除其号並從公戸

雜賀鉢

曹小雜賀鉢といふがかり雜賀ハ本國のふろき地名を以て名草  
海部二郡にわかれ雜賀莊の内より制をいふや今作らる

釘貫里

府城の北今内郭とふれる地を舊釘貫村といひて天正年  
中府城を築く及びて郭外に移り市廛をあらうむ  
北町といふ釘貫の名木二の具の釘抜より起るなり  
古書小冊をくみし事ありて是れ此地も閑塞とあり

や、浅聖氏の文書  
釘貫氏も尺ゆ

昌平河岸

湊の地東の片町より南北に通ずもとハ湊片原といふ文  
化年中今れ名小改め文政年中分ちく三町といハ外隍小湊へ  
片側寄合橋の詰まで干店を  
建けぬ夜店ありていと賑ハ  
柿園文集

昌平河岸納涼日記

山丘を勢せりゆく市を跨りゆくありゆるありゆる  
くより暑中六因してゆつゆくあり昌平河岸は遠く  
ま此頃を知るもまよぬもお卯んやゆきうわ人遠るも  
疎てお人分下垂るる太刀の柄をやふる袖に結れ堅魚  
を老法師の袈裟をとり破りて走る蝉の羽ありたる  
歌法のしらばきしておろハ涼き窓内春を多るにあり  
我ハ顔も相撲人も暫くさりてきうハありと後自り  
おとせりたりたるもあき海に押やられ中汗出る物  
方々群居て賣る種々目うつふ流れゆく川つにけ渡

きる煙のあかた當りりきもえりはは橋をぬ追風と  
きて夏瘦小うといつ物を思ふせ運多は最飯を世の溜  
夏の花形くも菓子も粒塵を居るる糰餅結果を神さ  
これと後くもろきれ急きもろ所を洗川の玉串ありて  
弱肩も太も膝もり掛て耳高ももいとむつろ喬麦ハ何  
かこれと人の國は勝れる味を誇り醴酒を六月七とい  
御膳も毎ふとくゆきもや友も人の好むも兼好誠  
一程とてハ井朝真真更らけを好むをよの品と中下と  
中より海の老れ若く入り躍り出てもん也價乃さ  
なしていとまはに記事あり大なるも足も十文字  
ふを傍もた動きあくるまにされるもむれもく  
ういゆまなれん強て行むく冬散樂男うせれ空  
菓子齎くをり又何事をとりありんとてま  
福

不映歌樓上手移講館旁託根能得所一段發春光  
 非是隨堤種垂枝欲掃塵託根能得所迎送讀書人  
 適有播紳客眼青弄翠煙託根能得所幾費好詩篇  
 託根能得所風外捲金絲頼免他人折未知離別悲  
 託根能得所萬縷影重重相對綠陰底使人輒歛容  
 詔賢山正住寺  
東長町、あま法華宗一致派京妙覺寺、属、旧、真言宗  
 びり、小文明年中妙覺寺、真如院、日住、再興、して、改宗、以

不映歌樓上手移講館旁託根能得所一段發春光  
 非是隨堤種垂枝欲掃塵託根能得所迎送讀書人  
 適有播紳客眼青弄翠煙託根能得所幾費好詩篇  
 託根能得所風外捲金絲頼免他人折未知離別悲  
 託根能得所萬縷影重重相對綠陰底使人輒歛容  
 詔賢山正住寺  
東長町、あま法華宗一致派京妙覺寺、属、旧、真言宗  
 びり、小文明年中妙覺寺、真如院、日住、再興、して、改宗、以

詠學館柳首五

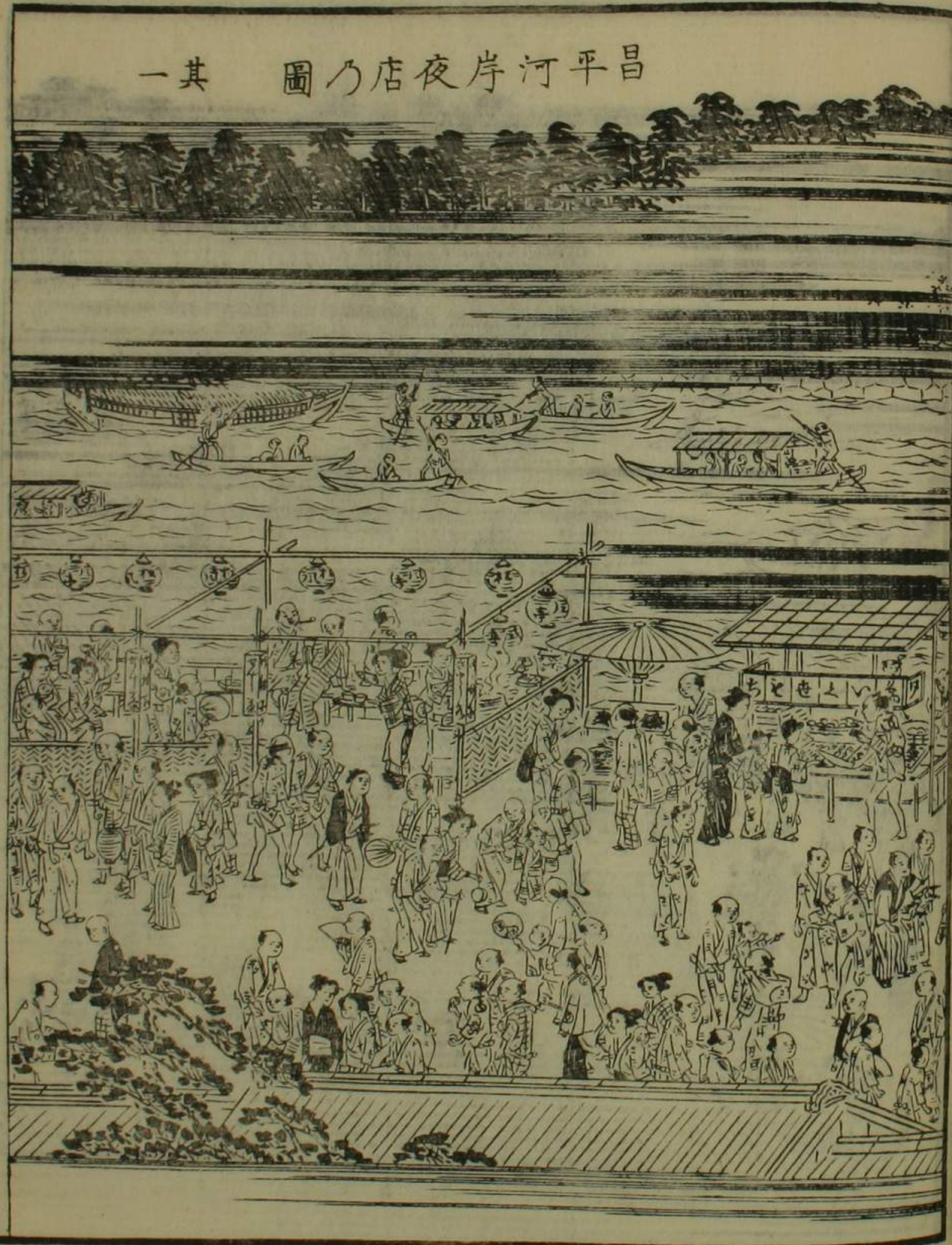
岩橋景淳

柳樹正徳年中、中國、校を建、一時、岩橋景淳、館内、植、り、教、年、を、一、て、繁、茂、を、  
詳、風雅集、見、え、る、其、後、教、年、を、歴、て、館、の、外、より、益、繁、茂、也、  
 梧桐欄干、星、ゆる、天文、博士、句、詩、誦、ど、何、文章、生、或  
 ハ、異、竹、ま、り、け、し、を、い、れ、芳、野、河、を、引、く、恨、あ、る、も、多、り、り、也  
 水、以、風、漕、け、を、れ、る、小、舟、に、隙、を、架、通、り、て、月、を、や、更、如、れ、と  
 學院、乃、柳、の、蔭、を、於、暗、う、る、頂、

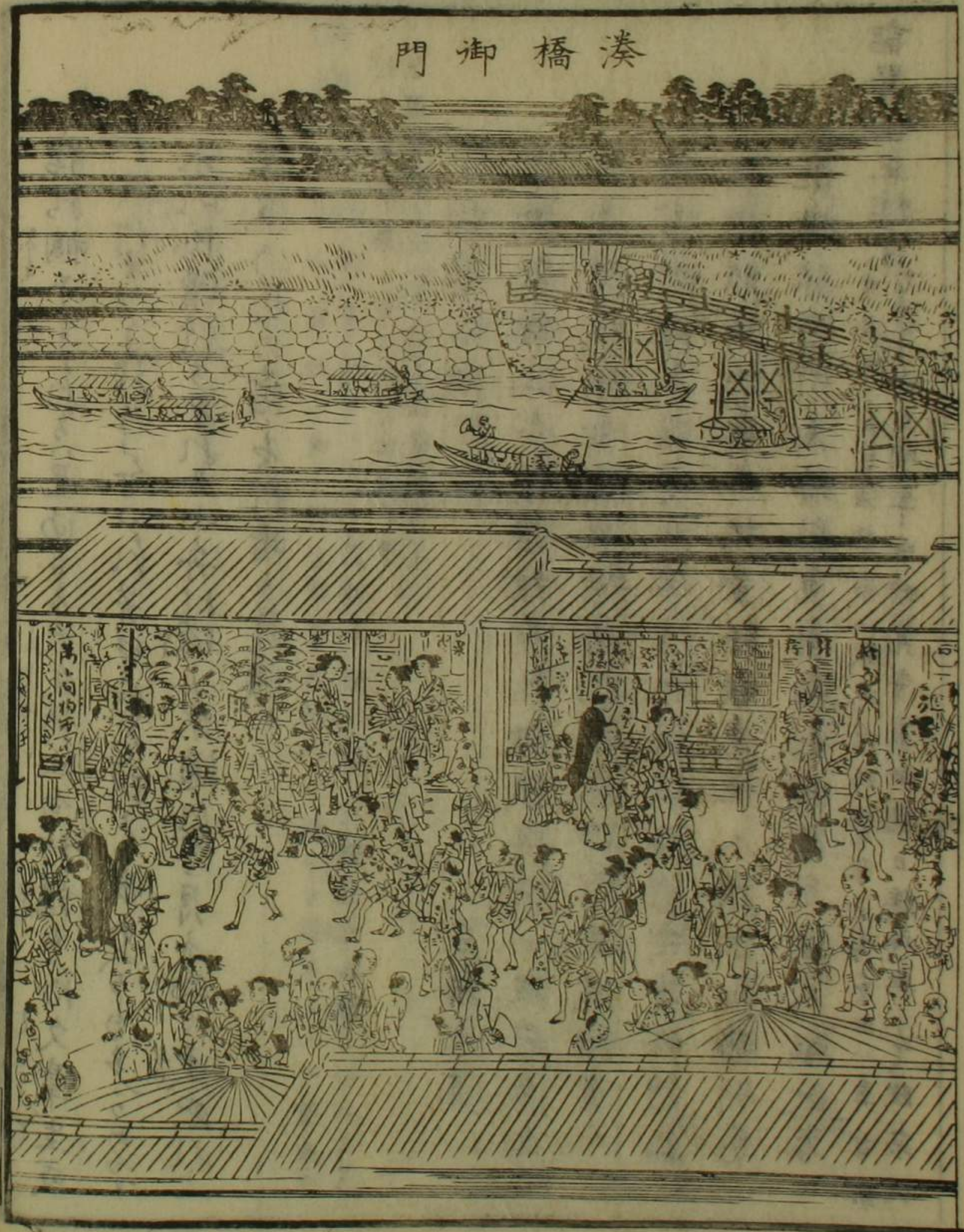
詔賢山正住寺

東長町、あま法華宗一致派京妙覺寺、属、旧、真言宗  
 びり、小文明年中妙覺寺、真如院、日住、再興、して、改宗、以

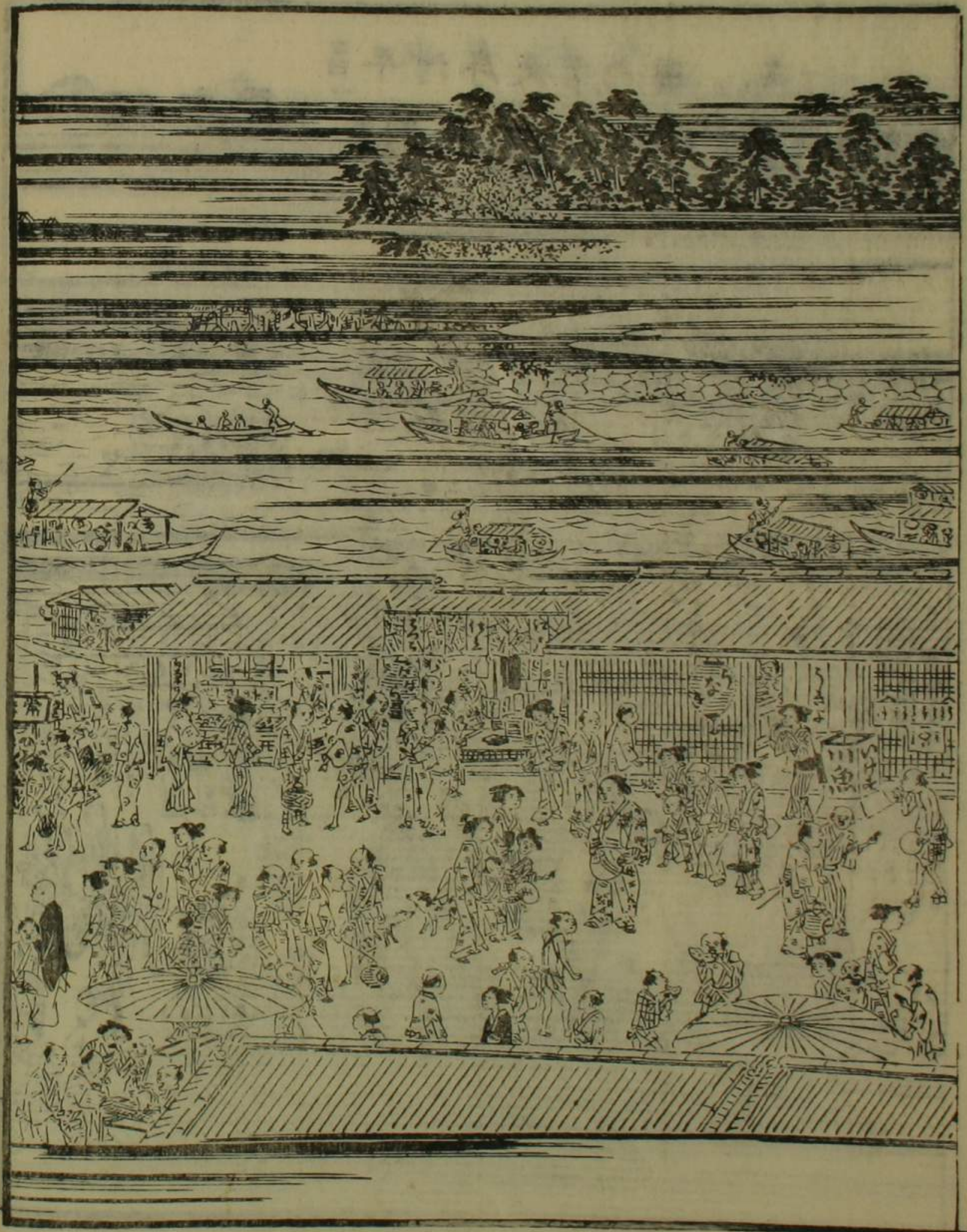
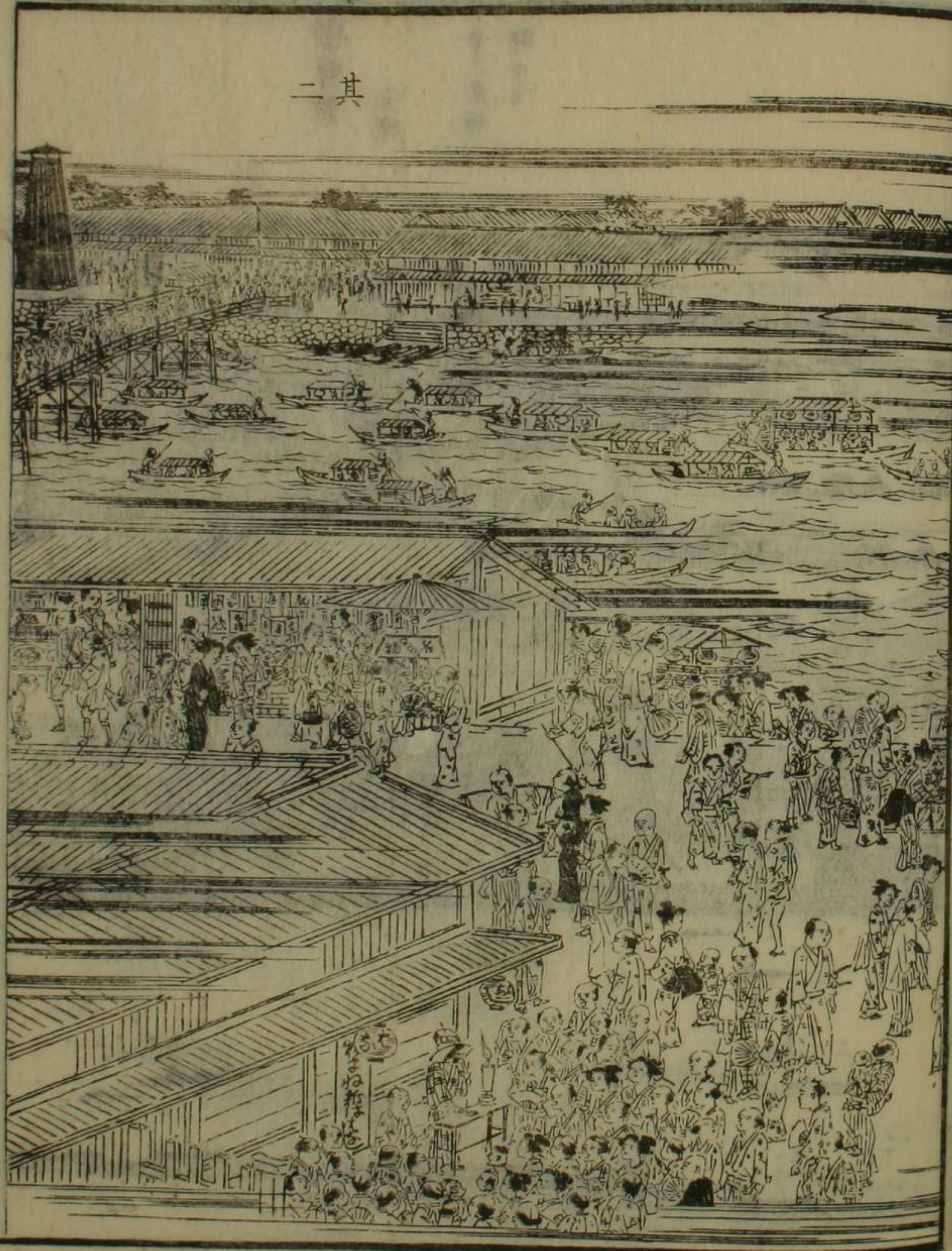
昌平河夜店圖 其一



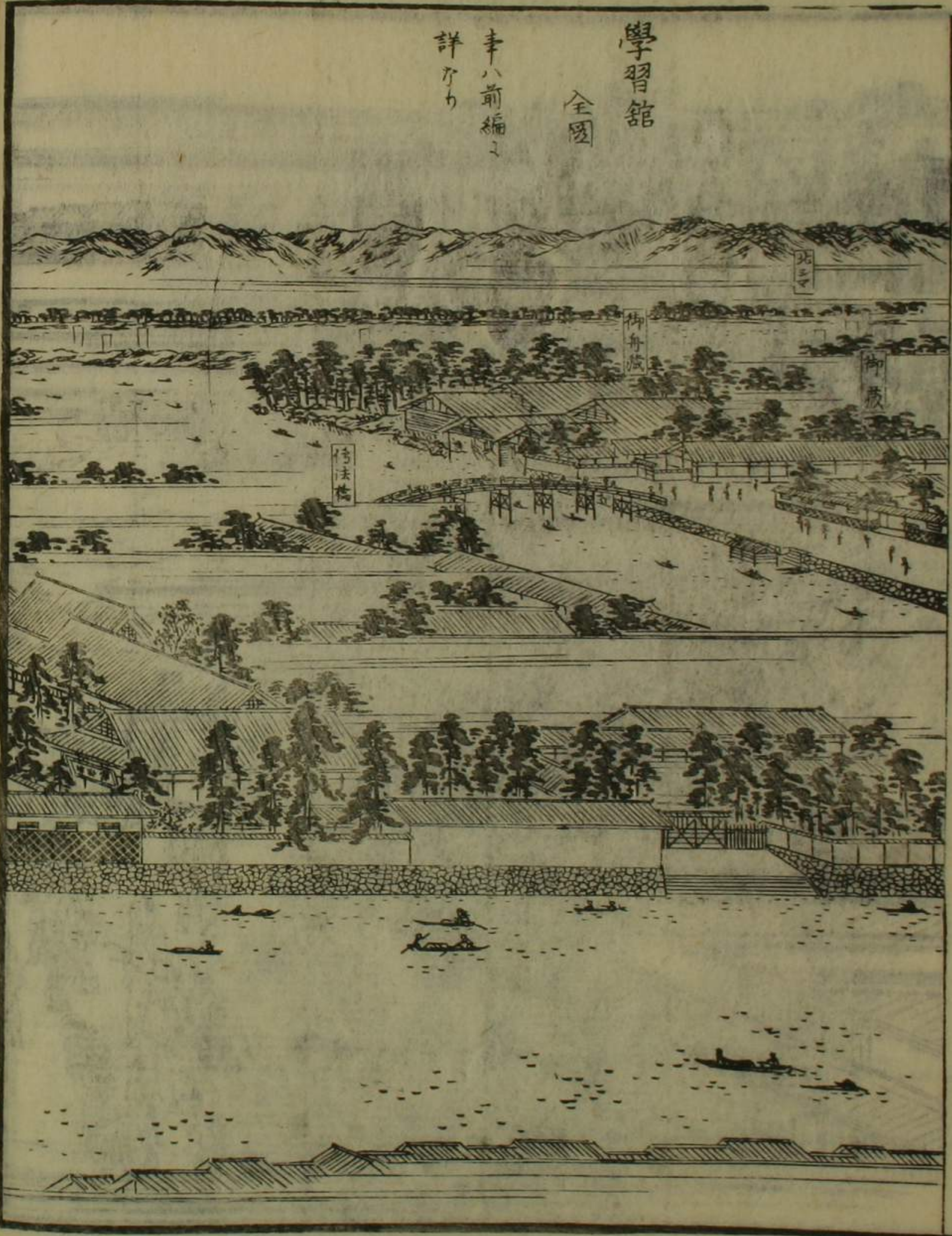
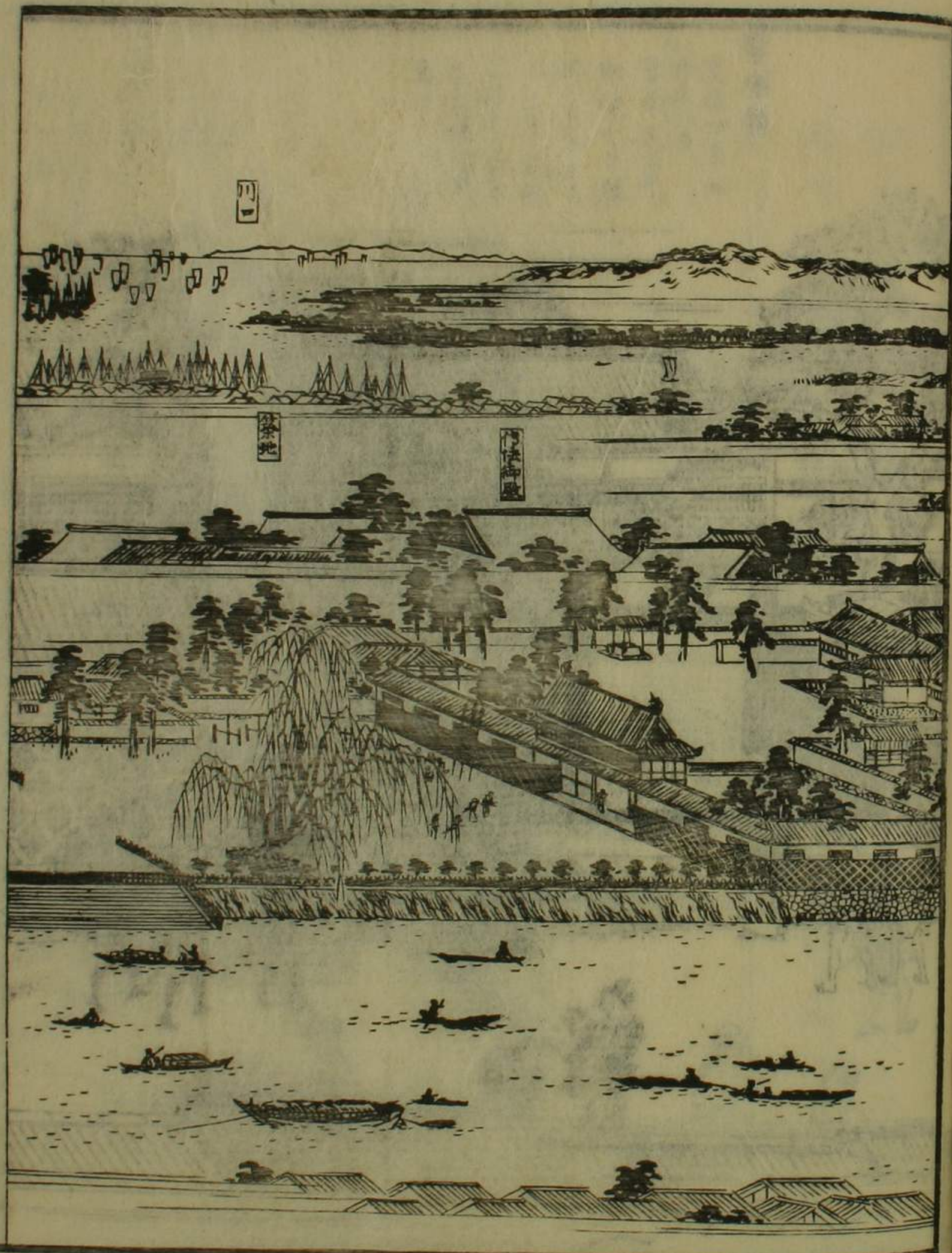
湊橋御門



二其







醫學館

寛政四年四月十八日

官命ありて

創造せり恒

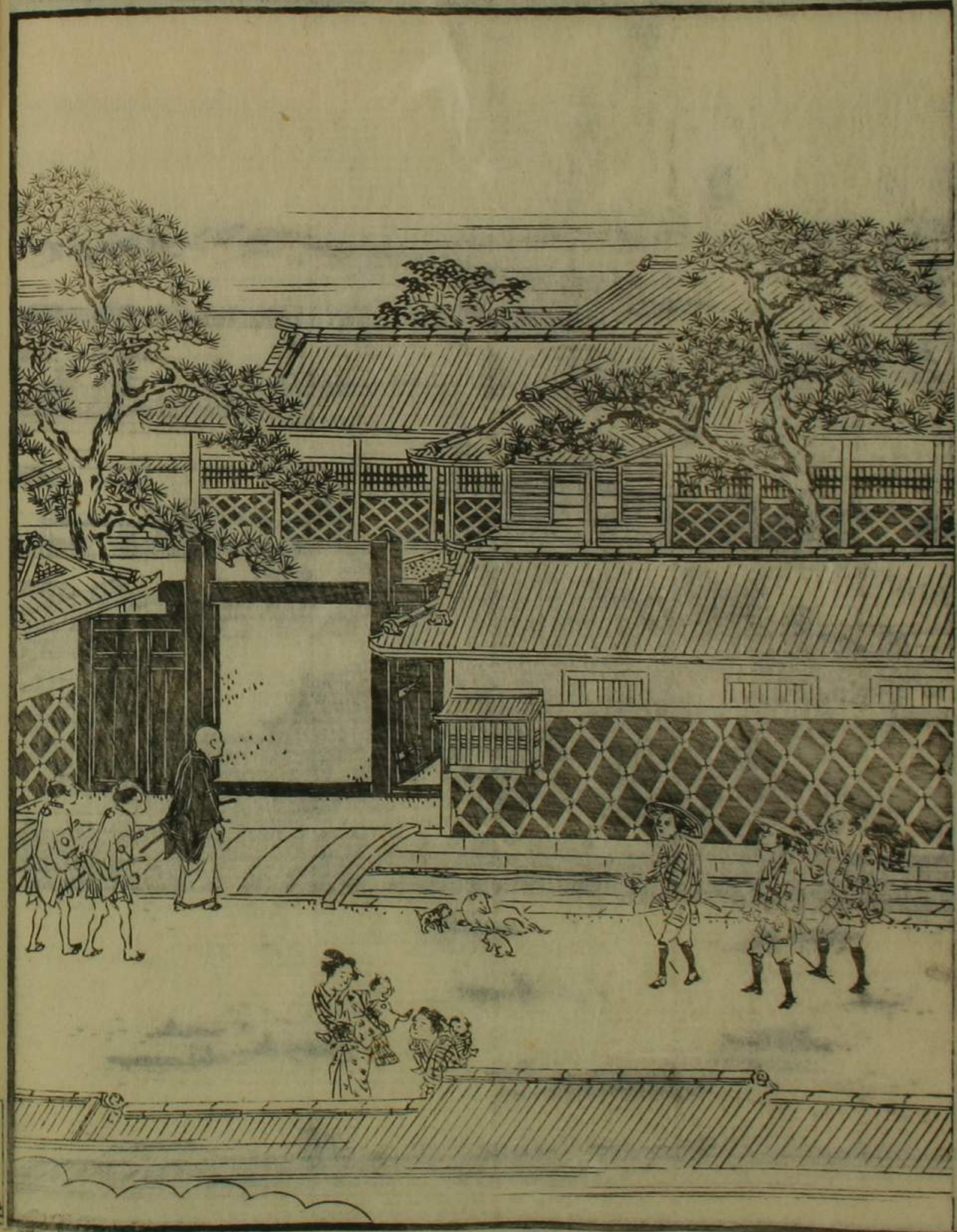
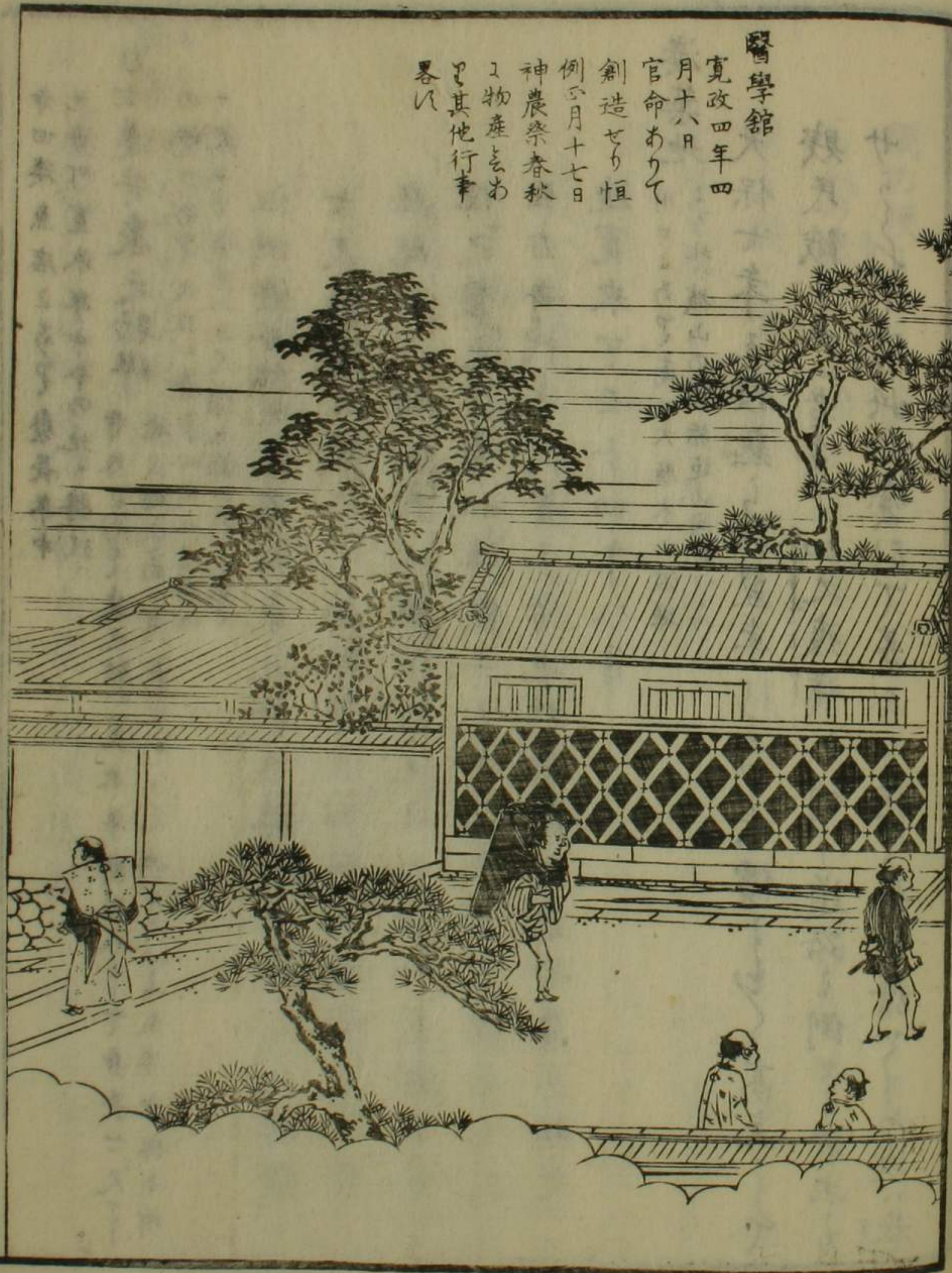
例五月十七日

神農祭春秋

ノ物産をわ

り其他行事

畧し



寺旧湊魚店あり慶長年中  
元寺町寛永年中今の地に移す

力士蓮井象之助碑 寺内あり象之助八寛永年間の人にて身長七尺  
の雙刀あり大刀八身長四尺五寸中心  
一尺五寸小刀八三尺餘也銘ハ虎ニ載す

江州湊井郡之産蓮井象之助鬼勝行年二〇九身長  
七尺強臂力過人又能相撲無有與此敵者頃年来  
在紀州一時使良冶鑄所自佩之刀勢如長戟鬼勝  
揮之擊之其易如轉骰子不亦快乎實可謂希世之  
巨力奇代之大男子者也於南紀肥前守藤原鎮忠  
造寛永丁丑十四年八月

湊築地

川口よりあり南ハ大雁木の波塘  
より北ハ城山の波塘迄の間をいふ

天保七年五穀熟らば翌年に至り米價も高く高直して  
賤民餓え及ぶ者多し加之疫癘流行し道路も倒る者亦多  
しサレども官此を憂ひて茅舎を建て病を療むり或ハ巷

衢の便よりて粥を施すといへども窮民於此に更なる川さ  
らへの舉あり折海路の運送年々小繁く川口塵埃も埋れて  
淵も瀬も變り通船此便宜より其窮民をして土砂を堀  
と地を築く其用度を與へて餓を救ふ此舉五月中  
旬より始て九月上旬小至り人数も老若男女も一町に數千  
人より及べ築地の廣袤南北八町許東西一町に及べ此  
一と云ふ海潮の衝る所を水底の淺深定むる役民多  
くハ氣力微して脛弱なれ土砂は運むる難し役民多  
かるを以て遂に其功就きり實に救荒の大舉といふ處  
るれども漸く宅を築き魚市此場より運送も以前に  
倍を架

漁者

湊上町網屋町材木町植松町の四町を漁夫  
多し因り上古海部の大抵を充てり載す

應神天皇の御世海人部を定め大濱宿禰を海人の宰とす

湊築地の景

河船蔵の國

南紀風雅集

正月陪

國君駕船春遊

遊賞不辭垂夕暉

童冠醉舞着春衣

回看南海足歡樂

萬里風帆自在飛

那波道田

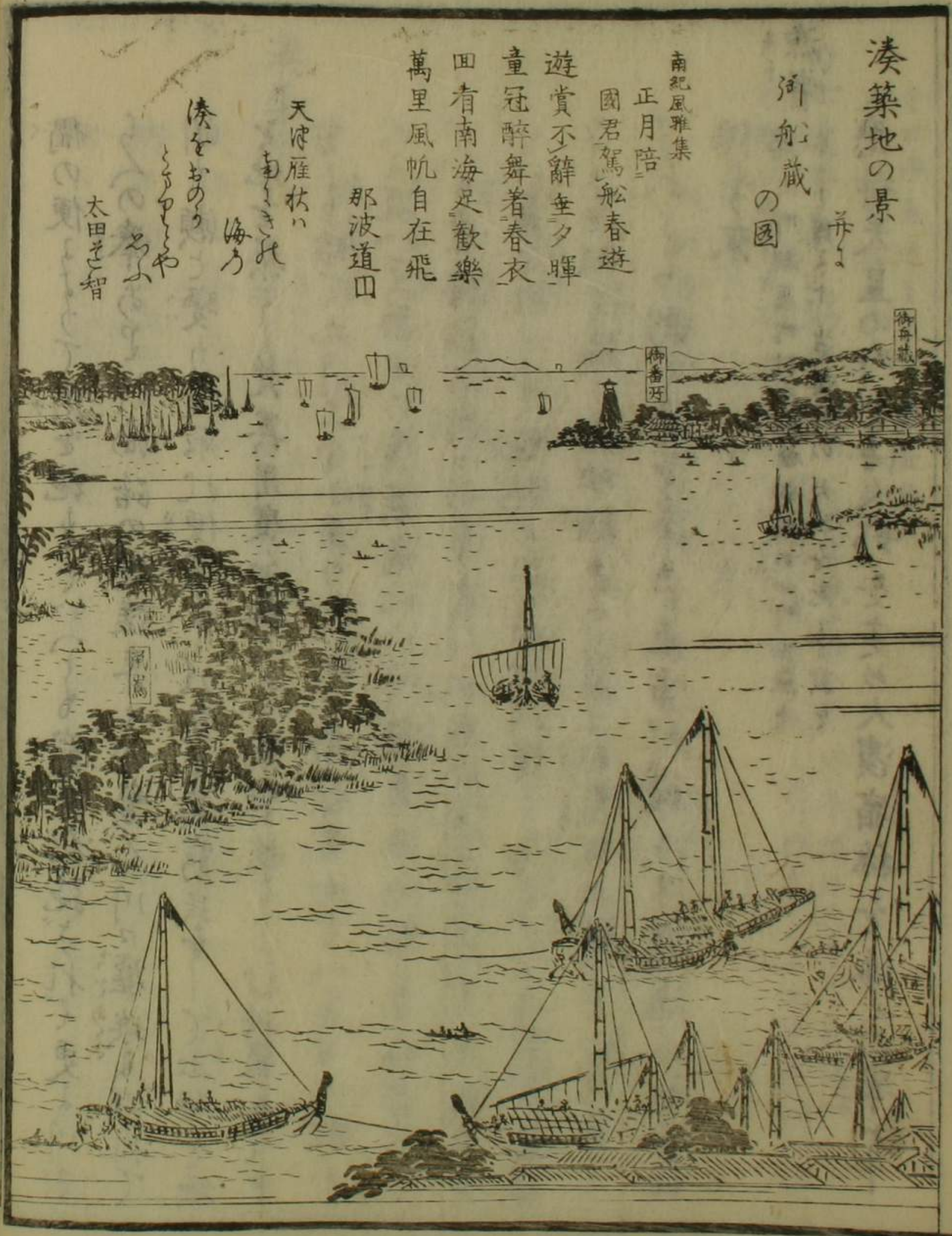
天保雁杖

海

湊をおのり

太田

智



夏晚泛舟海口

火雲赤日影俱收

泛艇海門橫晚流

萬里長風驅暑去

孤峰明月送涼浮

棹歌遙唱青牛渚

漁笛忽驚白鷺洲

人世聲譽何足慕

一身已任一輕舟

井口仲虎

入るる舟

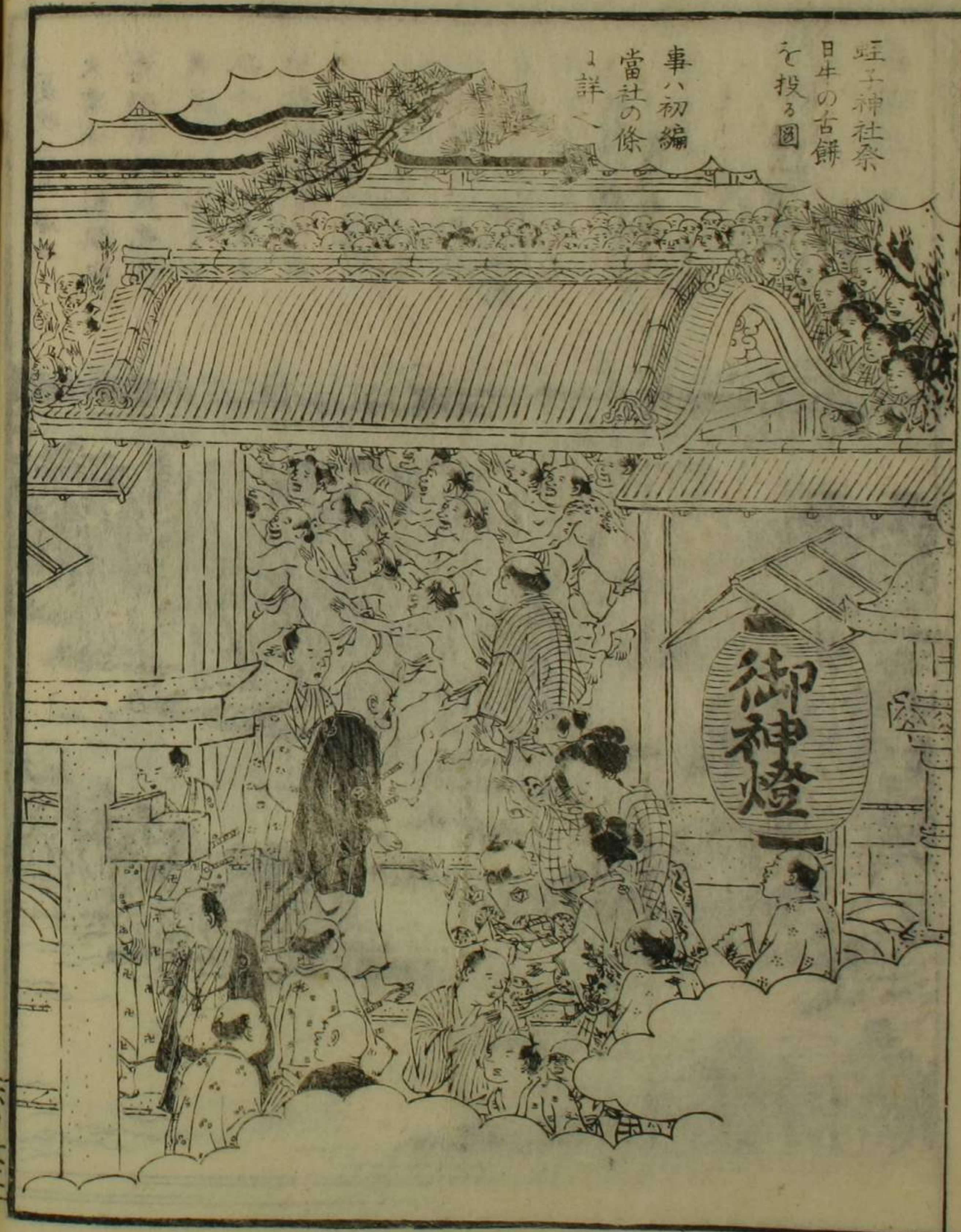
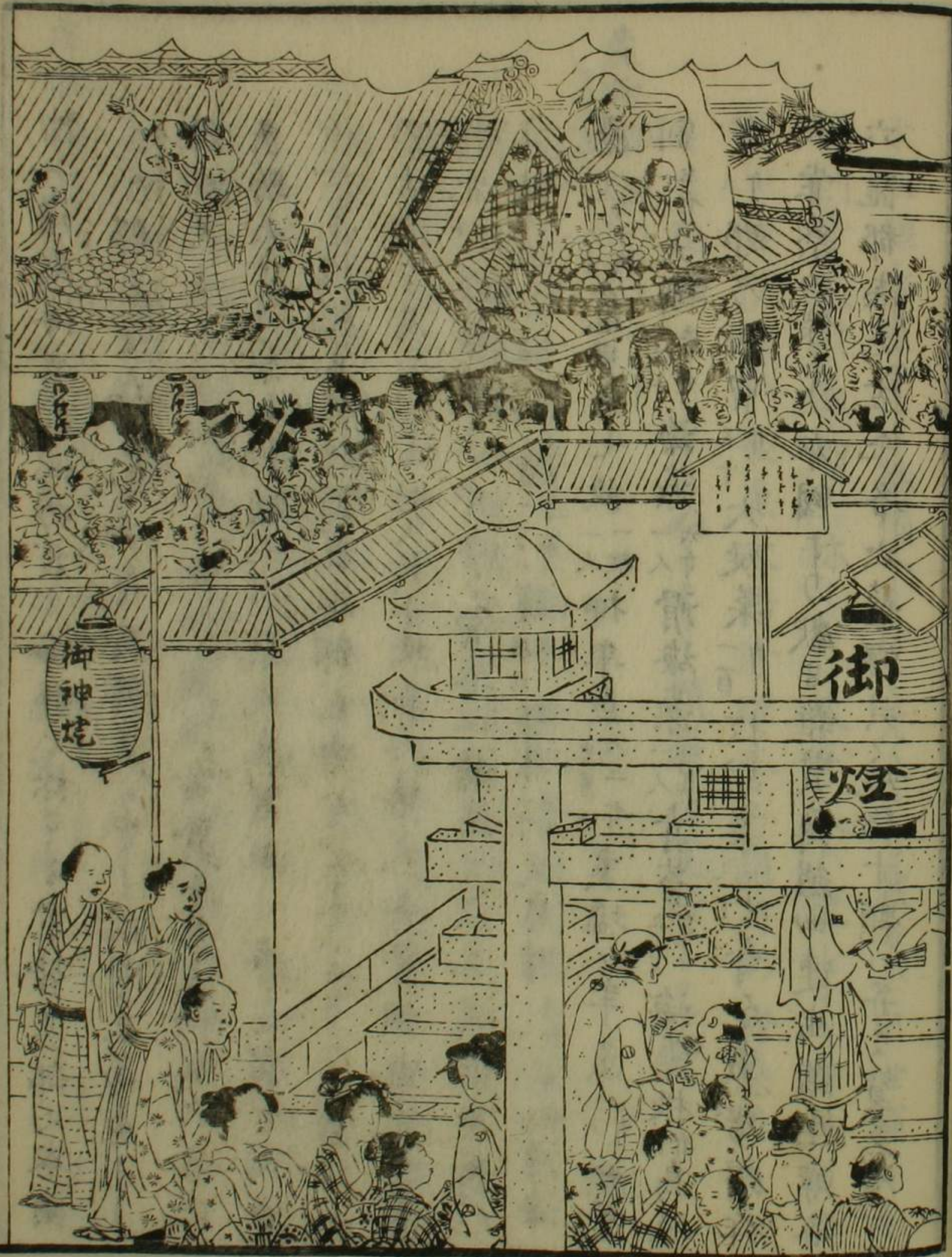
光のあけ

ゆつやみの

本居大平

本居大平





治ふ諸國海濱郡郷の名は海部と称する者皆其部之本國  
 も亦郡名を存すゆめ其部多しと云ふ事あり  
 欽明天皇七年の紀は紀伊國漁者贄を負ふ州馬の子に  
 良駒ありしを大和國人川原民直買取し事を載せ同帝  
 十七年比紀は紀伊國置海部屯倉なりと云ふ事あり本國海人  
 の古書に見えし始之故小延喜内膳式御贄調進の條旬  
 料紀伊國雜魚上中下ノ旬各三擔半と見え其他本國比  
 貢調の中は塩一丁鮓一丁鮫一丁鰻一丁鰯一丁久惠腊一丁滑海一丁  
 藻一丁龜甲十七枚一丁押羊魚一丁煮塩一丁羊魚一丁鯛楚一丁  
 割一丁大鰯一丁海藻一丁滑海藻一丁青苔一丁海藻根一丁鳥坂一丁  
 苔一丁那乃利曾一丁大疑菜一丁抄胡菜一丁等を載抄踐祚  
 大嘗祭の條より本國より獻る雜贄薄鯨四連生鰻生螺各  
 六籠都志毛古毛各六籠螺貝ノ焼塩十顆ハ并に賀多潛女

十人程を量りて採備しむと見えし然る小中世浦くも  
 権門勢家此漁釣と称し莊民寡人と號し神祇官の  
 龜甲齋院襍乃堅魚大膳修理木工諸司の海藻雜魚亦  
 をも進濟せしむるより類聚符宣抄に見えし也

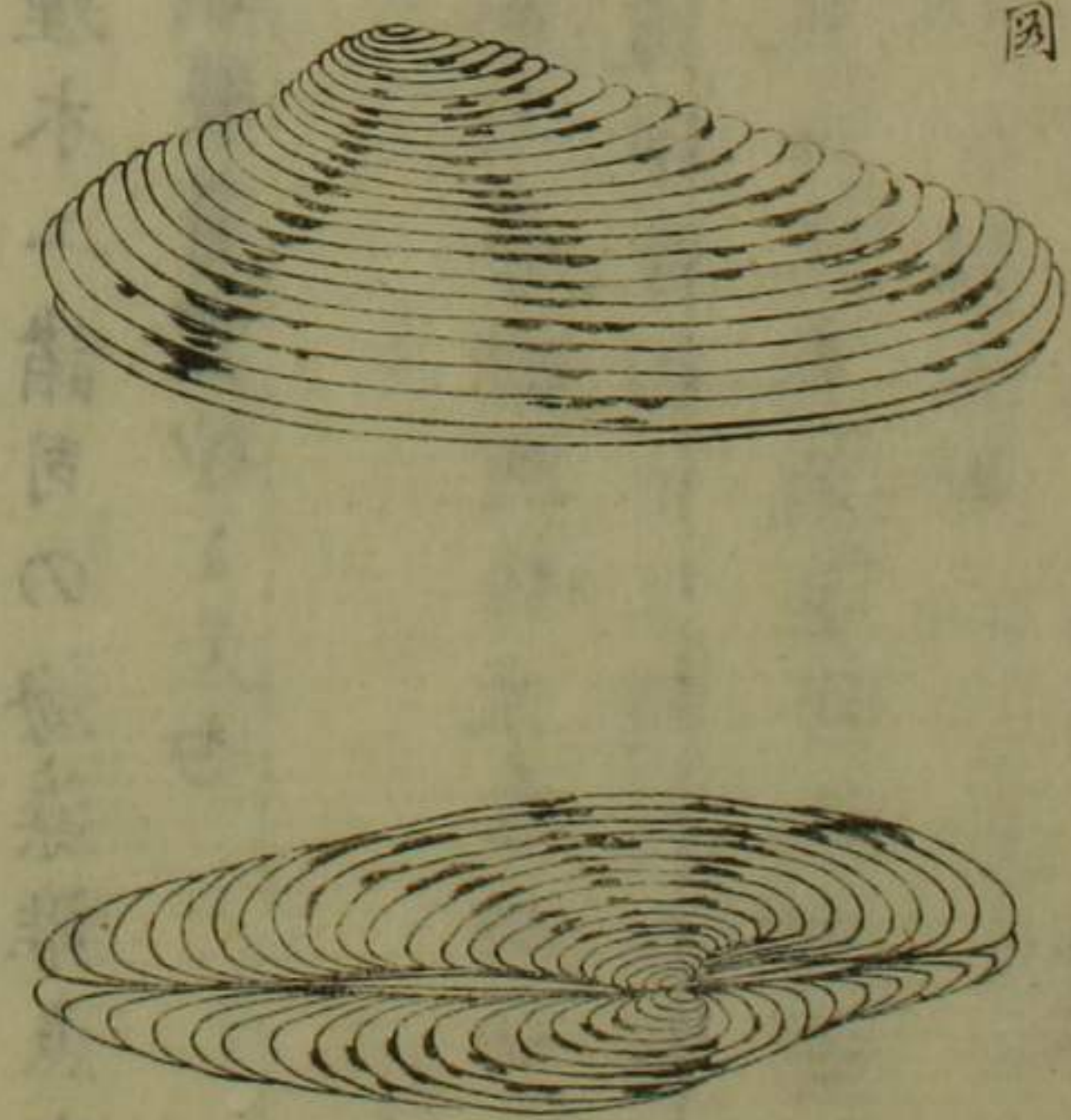
産物 鰻若川を上品とす  
日本靈異記云

吉野山有一山寺名号海部峯也帝姬阿倍天皇御世  
 有一大僧住彼山寺精懃修道疲身弱力不得起居念  
 欲食魚語弟子曰言我欲啜魚汝求養我弟子受師語  
 至於紀伊國海邊買鰻八隻納小櫃而歸上

初秋四日紀川浮舟遊漁即賦一絶 藤朝臣俊純  
 輕舟短棹紀川濱綠水銀沙杳莫根炎暑未收秋未見  
 西風網裏紫金鱗

産物 簾貝 乃一種也今府下比西荒濱り産す吹上の旧地なり

形を以て名とす品類多し直に簾と称する者此一名つらみといふ  
 形筋蛤々似て肌淡褐色斑文光澤あり横溝龍相並ふ雌雄あり  
 雄は厚く長し雌は壳長く色淡黄して理文細く文点彩色も濃なり  
 其大なるを香合とて翫ふ又姫簾々あり一名ヒメ衆といふ形芦々  
 いふ力の似て肌灰白色して褐斑あり又阿波簾々あり形姫簾貝に似て  
 肌淡褐色して深褐の斑文光澤あり又伊豫簾々あり形簾々に似て  
 く肌滑して淡褐或は灰白或は深褐斑ありて細の如し又よし簾々あり  
 一名姫あざりといふ形伊豫簾に似て壳薄く  
 肌淡黄色簾のとき横文理あり其一二を因



吹上御別墅の舊跡

出口の西にあり今はうん屋鋪といふ元祿の比にや  
 森十兵衛といふ人の記あり古のさま想像すべし

吹上御別墅の記

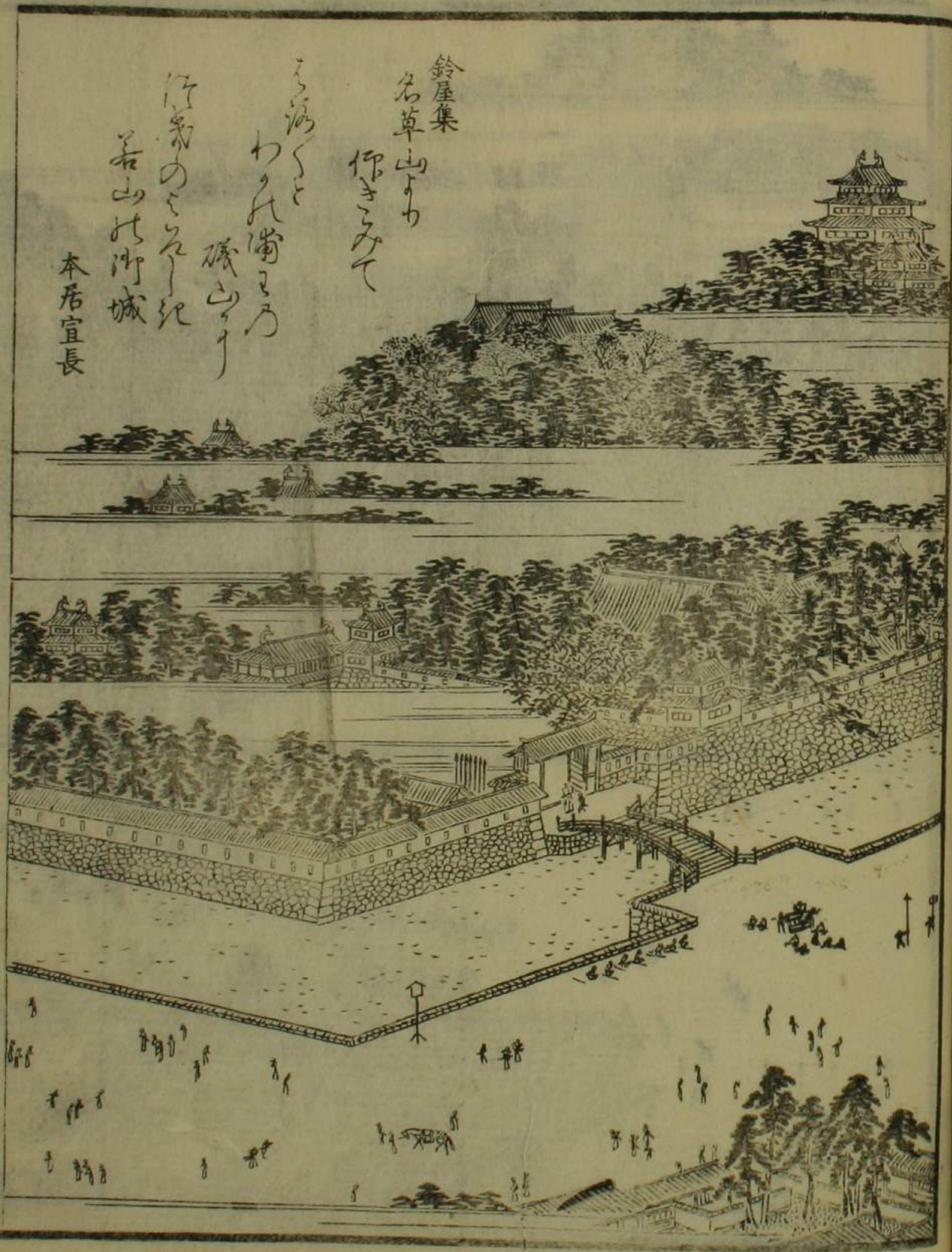
凡海山代とくれとるる色を足れとてその一りふ  
 事ハ大和もろ志古今にわたりて人の心をもつ性  
 養ひ壽を可くすすともなりぬしさる此吹上の濱  
 に入より名よおふ所有久を我君ひより御使し  
 志免させ給ふ濱川のほとり日のすみそ松乃林木あつく  
 立川ききよりあふくつらういふわれおますああ  
 志つらねおろを給ひおほやをわくくしあつたのち  
 夏は渡りをはりて道遠かろし府城をくらか  
 り事うつに数町おきお軒場もいと近をれと人の  
 け来る道はゆるあふねん常いしお静かなる西直れ  
 うらわ和田能原まで浪りてゆる淡路島にゆき  
 とし阿波島かと巻くも近くさあふる所多し  
 又此必國のうらに名ある所数多侍系中より和歌若浦

雑賀の崎<sup>ざいかに</sup> 帆<sup>ふね</sup> 乃<sup>の</sup> 浦<sup>うら</sup> あくくの濱<sup>はま</sup> をとやうく此<sup>こゝ</sup> にて架<sup>か</sup>  
みきよつきよれハ朝<sup>あさ</sup> か夕<sup>ゆふ</sup> 外<sup>ほか</sup> 海<sup>うみ</sup> 土<sup>つち</sup> 舟<sup>ふね</sup> の漕<sup>こ</sup> めるもほと  
あくあくとこのあふりわ布<sup>ふ</sup> 荊<sup>しん</sup> 境<sup>ぎやう</sup> やくおろいふかこんま  
もつれくおれと花<sup>はな</sup> あぬと詠<sup>よめ</sup> きわれ 浪<sup>なみ</sup> をいつとかく  
立<sup>た</sup> ちときーあれと様<sup>さま</sup> もあはしれ浦<sup>うら</sup> 風<sup>かぜ</sup> の涼<sup>すず</sup> けを文<sup>ぶん</sup> を  
もつれ小<sup>こ</sup> 燈<sup>とう</sup> の淺<sup>あせ</sup> 芽<sup>め</sup> 生<sup>な</sup> のう 枯<sup>かれ</sup> るとわあゆ虫<sup>むし</sup> のねをあハ  
まきと友<sup>とも</sup> ととをふ千<sup>ち</sup> 鳥<sup>ちう</sup> 此<sup>こゝ</sup> 聲<sup>こゑ</sup> 小<sup>こ</sup> 假<sup>かり</sup> 夜<sup>よ</sup> の羞<sup>はづ</sup> れをさあかあ  
まていれけくまへくもあはれとち集<sup>あつ</sup> め與<sup>あ</sup> らふ中<sup>なか</sup> 四<sup>よ</sup> 此  
時<sup>とき</sup> もうは月の暮<sup>くれ</sup> るところ珠<sup>たま</sup> けしとくれをうへをれ此<sup>こゝ</sup> 路<sup>ぢ</sup> 志<sup>し</sup>  
遠<sup>とほ</sup> 山<sup>やま</sup> うるげふと出るよりさあうるれく浪<sup>なみ</sup> のわけて千里  
の浪<sup>なみ</sup> うるや記<sup>き</sup> ららうるもえといえれきをうきを詠<sup>よめ</sup>  
まして曉<sup>あけ</sup> ちうく成<sup>な</sup> らと月<sup>つき</sup> ありかといれらん島<sup>しま</sup> 山<sup>やま</sup> も只<sup>ただ</sup> 此  
目の前<sup>まへ</sup> 小<sup>こ</sup> 舟<sup>ふね</sup> くれえさうも聞<sup>き</sup> えし 佐<sup>さ</sup> のえ代<sup>しろ</sup> 卷<sup>まき</sup> もじとくはあん

ちうとく 法師<sup>ほうし</sup> とややきよんをうらむといふかこらんとうとく  
實<sup>じつ</sup> にはる事<sup>こと</sup> とれとおほゆれ いはるも甚<sup>た</sup> 此<sup>こゝ</sup> 海<sup>うみ</sup> を入<sup>い</sup>  
人も足<sup>あ</sup> きといはけいよれ演<sup>えん</sup> 此<sup>こゝ</sup> うといふ一年<sup>いちねん</sup> の春<sup>はる</sup> うとよ  
仰<sup>おほ</sup> あこちに近<sup>ぢか</sup> くまつふよはふぶの吉<sup>きち</sup> 歌<sup>か</sup> あと誦<sup>ぞん</sup> ぶるが  
あまに作<sup>さく</sup> 事<sup>こと</sup> まさあてことめらうらにおほえぬとこれ書<sup>か</sup>  
吉<sup>きち</sup> の候<sup>こう</sup> をおほいこゝあるや足<sup>あ</sup> きといふと一<sup>ひと</sup> 羽<sup>は</sup> とほけら  
うらねるを我<sup>われ</sup> 候<sup>こう</sup> こあれとつみゆる川<sup>かわ</sup> 魚<sup>うま</sup> くや  
うはれこは足<sup>あ</sup> ねんあは演<sup>えん</sup> 此<sup>こゝ</sup> のうよれ浪<sup>なみ</sup> は流<sup>なが</sup> れる月<sup>つき</sup> をさる  
ねをともいふ上<sup>うへ</sup> の演<sup>えん</sup> ひこくき思<sup>おも</sup> らち世<sup>よ</sup> をつくめ  
うくなよあぬこをれと女<sup>め</sup> かのと書<sup>か</sup> けあんもうるさなれ  
とそらあくるこをいれを方<sup>かた</sup> 人<sup>ひと</sup> のあ

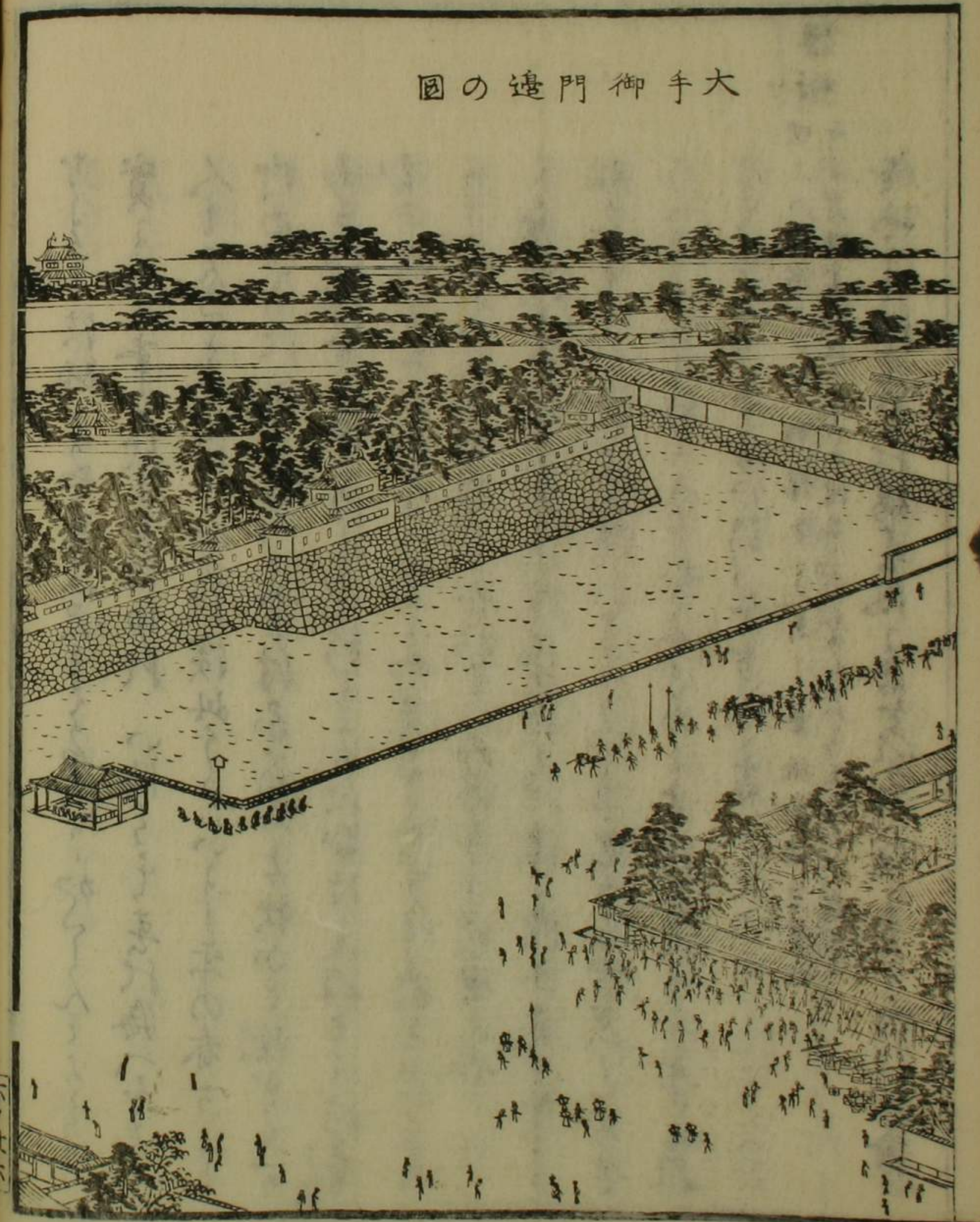
櫻<sup>さくら</sup> 樹<sup>き</sup>  
吹<sup>ふ</sup> 上<sup>の上</sup> の海<sup>うみ</sup> 濱<sup>はま</sup> 吉<sup>きち</sup> 野<sup>の</sup> 掃<sup>はき</sup> をうる 幸<sup>さい</sup> 祇<sup>ぎ</sup> 南<sup>なん</sup> 海<sup>かい</sup> 自<sup>じ</sup> 筆<sup>ひつ</sup> の  
奇<sup>き</sup> 々<sup>々</sup> 南<sup>なん</sup> 海<sup>かい</sup> のうらめはら 幸<sup>さい</sup> 祇<sup>ぎ</sup> 南<sup>なん</sup> 海<sup>かい</sup> 自<sup>じ</sup> 筆<sup>ひつ</sup> の  
きあこはに 櫻<sup>さくら</sup> 樹<sup>き</sup> 掃<sup>はき</sup> 幸<sup>さい</sup> 祇<sup>ぎ</sup> 南<sup>なん</sup> 海<sup>かい</sup> 自<sup>じ</sup> 筆<sup>ひつ</sup> の  
源<sup>げん</sup> 瑜<sup>ゆ</sup>

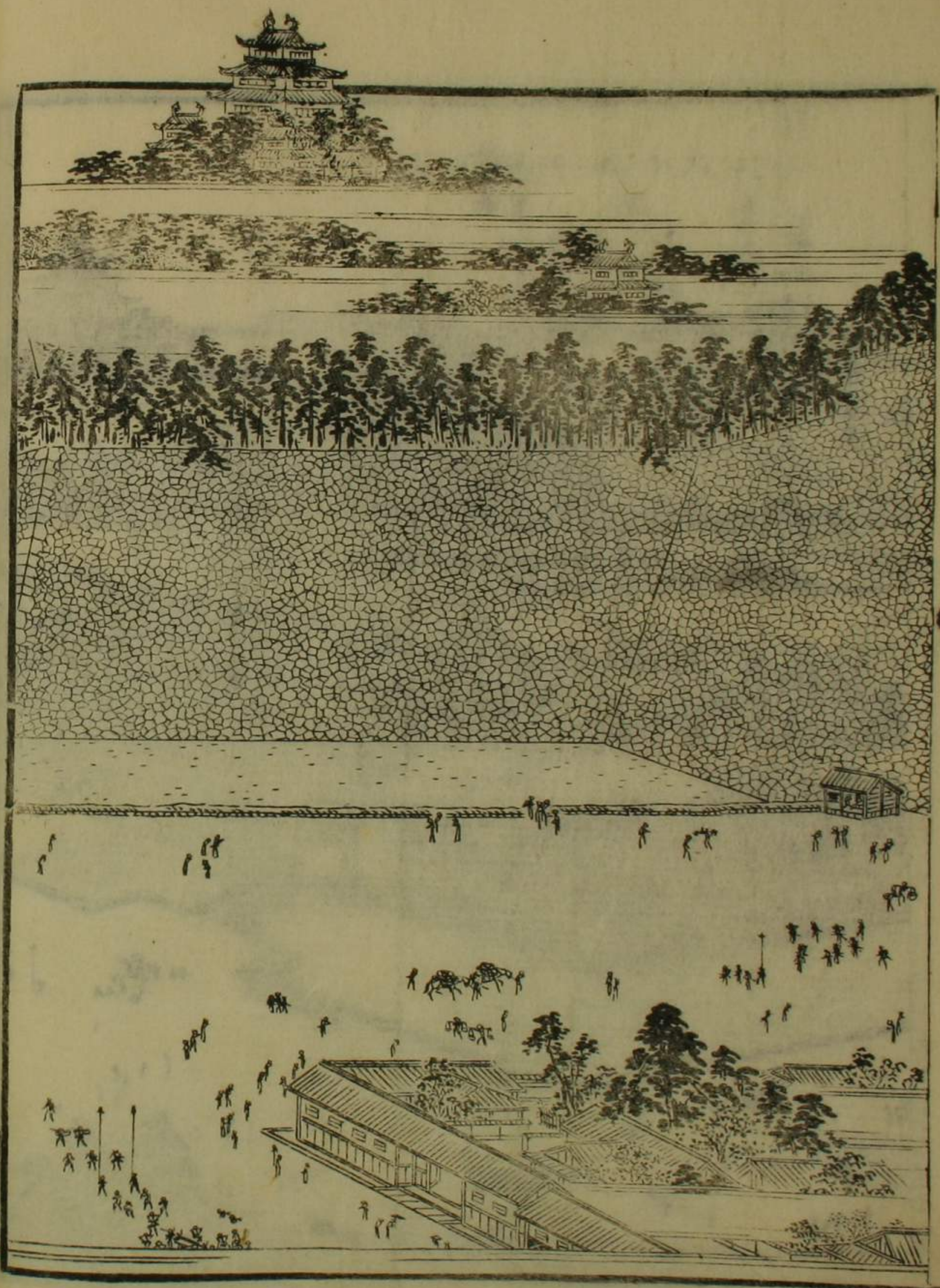
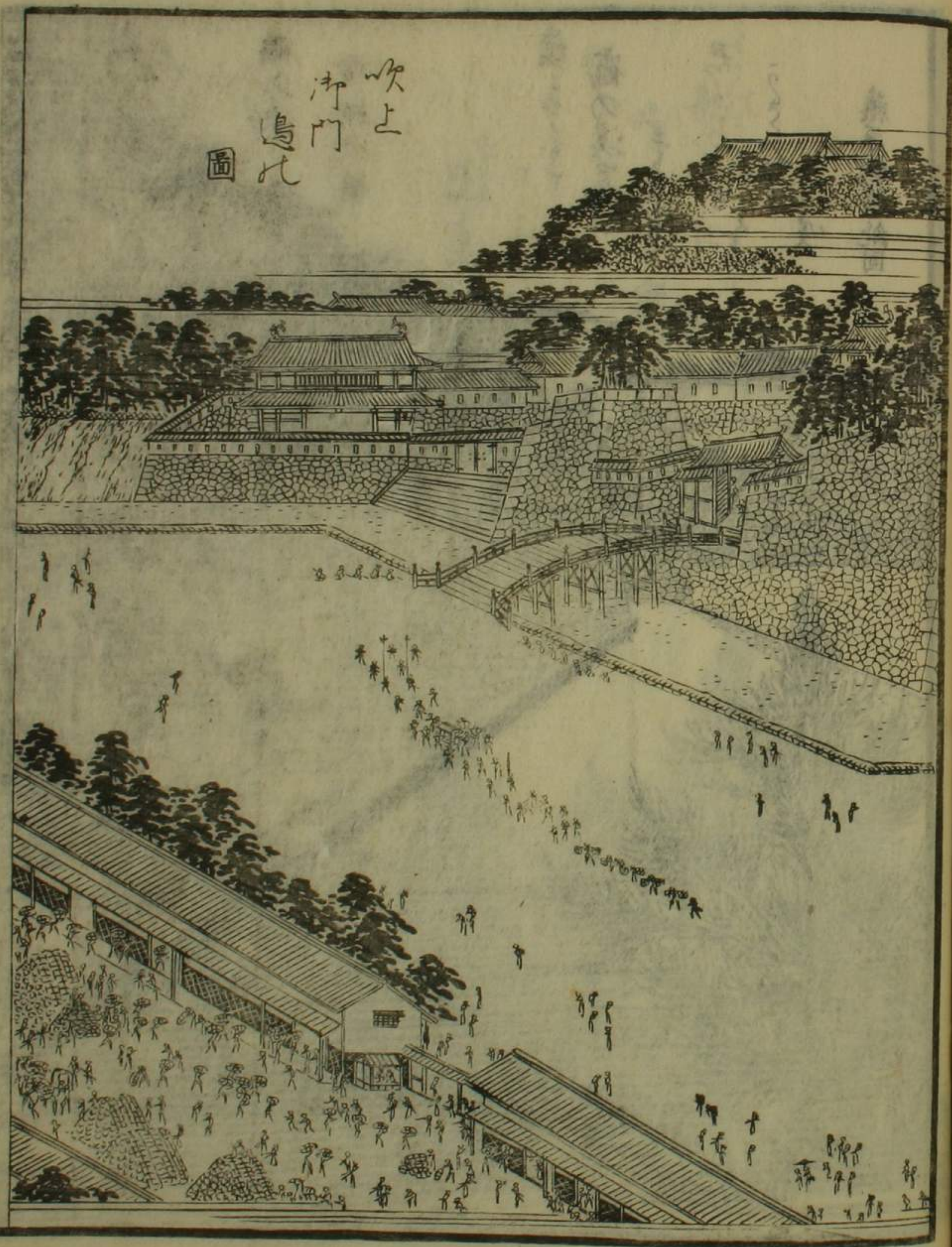


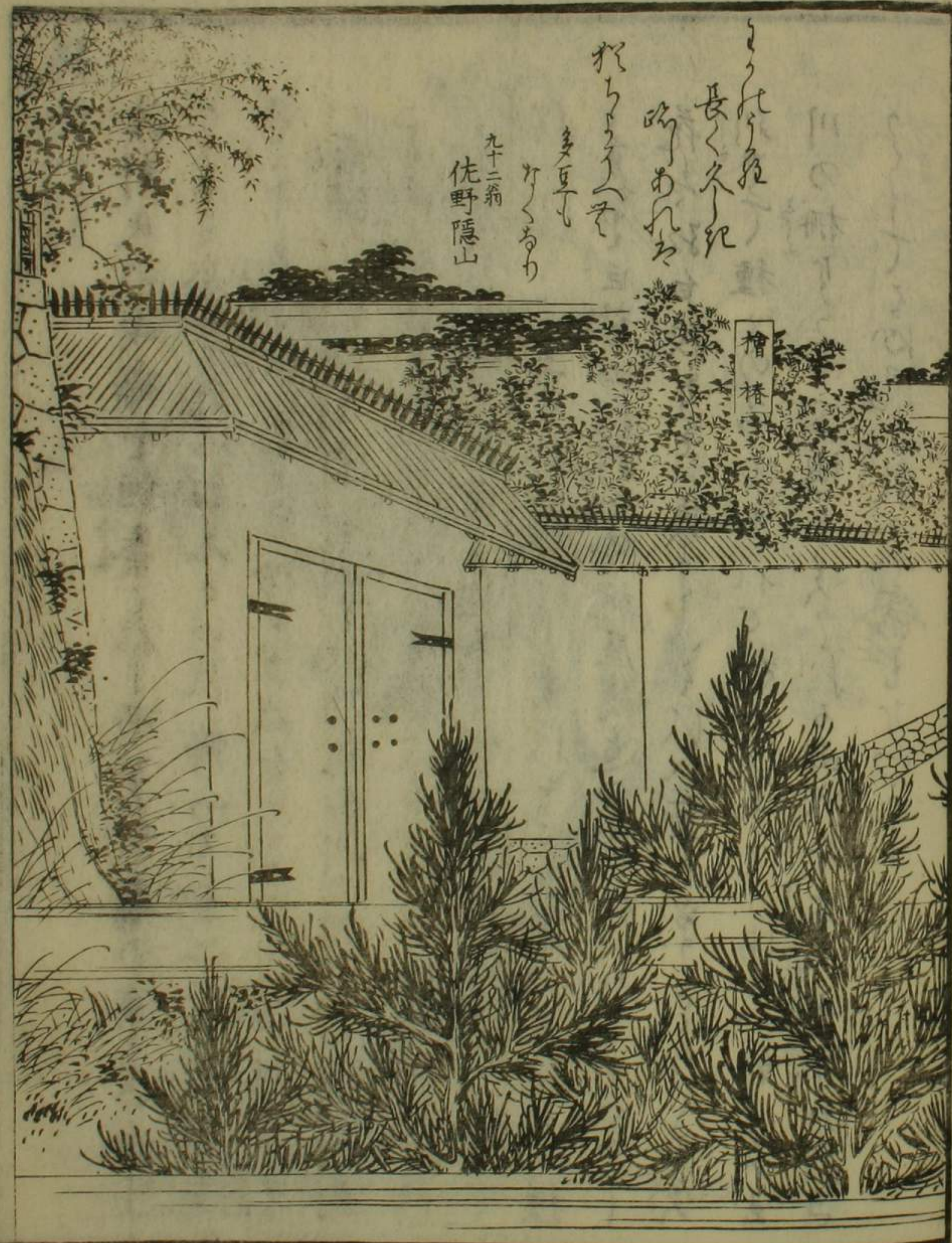


鈴屋集  
 名草山より  
 仰きこみて  
 くらあくと  
 わくれ備え乃  
 磯山より  
 行儀のまゝに  
 若山此所城  
 本居宜長

大手御門の圖

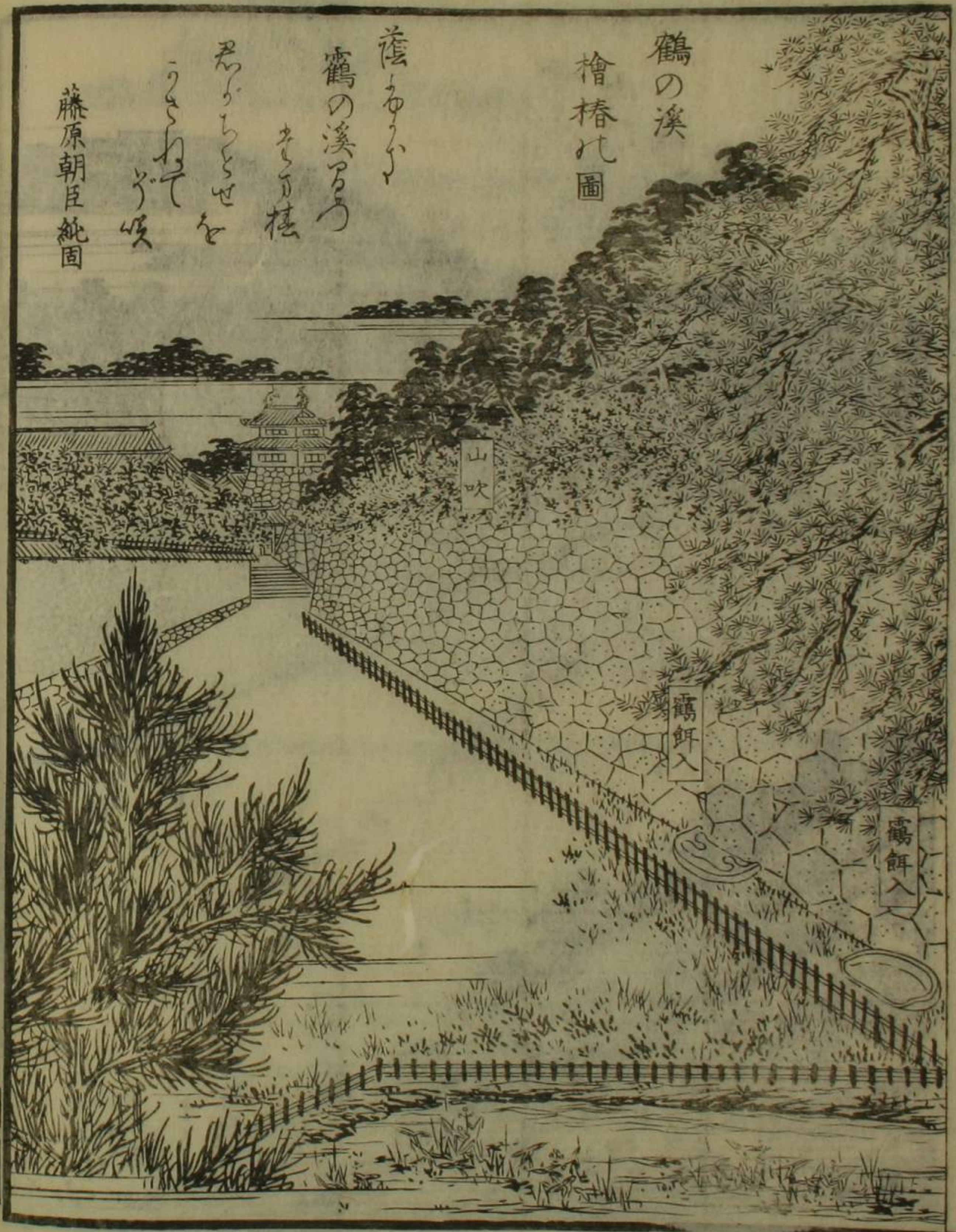






長久の紀  
 於りて  
 多豆下  
 九十二翁  
 佐野隱山

檜椿



鶴の溪  
 檜椿此圖

藤原朝臣純固  
 君がらしとせ  
 うさわて  
 ぐん

山吹

鶴餌入

鶴餌入

鶴溪 内野の  
申すあり

浅野氏の頃鶴を飼養せし所なり。鶴の溪といはるる  
 今も鶴の餌入といはれ傳ふる器二ツありて名  
 のまじり難す千歳まで流るる改をとりて珍し。溪の中  
 は苔深き巖の常日滴水汀の亀蓑代の敷を負重けて遊  
 び仙人の洞より入るるちびされん八千代乃玉椿の如く  
 生れずして幹も枝葉も核も似るるを此溪に名づる一種  
 瑞々しくまをこれハ檜榎と名けりて此溪に名づる一種  
 されし巨勢山に別々椿紙屋川迄の落榎は秋といふ  
 花を紅白交りてハ更にもいとハ八重も学もとりて  
 列して種々の名をあれと核も乃やととありて又玉  
 川の柵なりて言垣あり咲ける山に千本八千本を  
 けりて心風を散るる露もなり



八重檜榎の園



一重檜椿の園

大手御門 京橋口よむくつり披露  
 御舞臺 西の丸  
西の丸

親玉集

所位とるせむらひのうらみは猿樂傳されて八十殿人の資賜れり事あは比ハ  
 正月十餘三日於月夜さえもれるる雲傳は海かて雲も木まも白妙なせる  
 わもあ千歳と舞出るる面白くもいんも中へ藤原 千廣

萬世はけみのおとことうけて雪もうて水の松もちるる花む

藤原朝臣純固

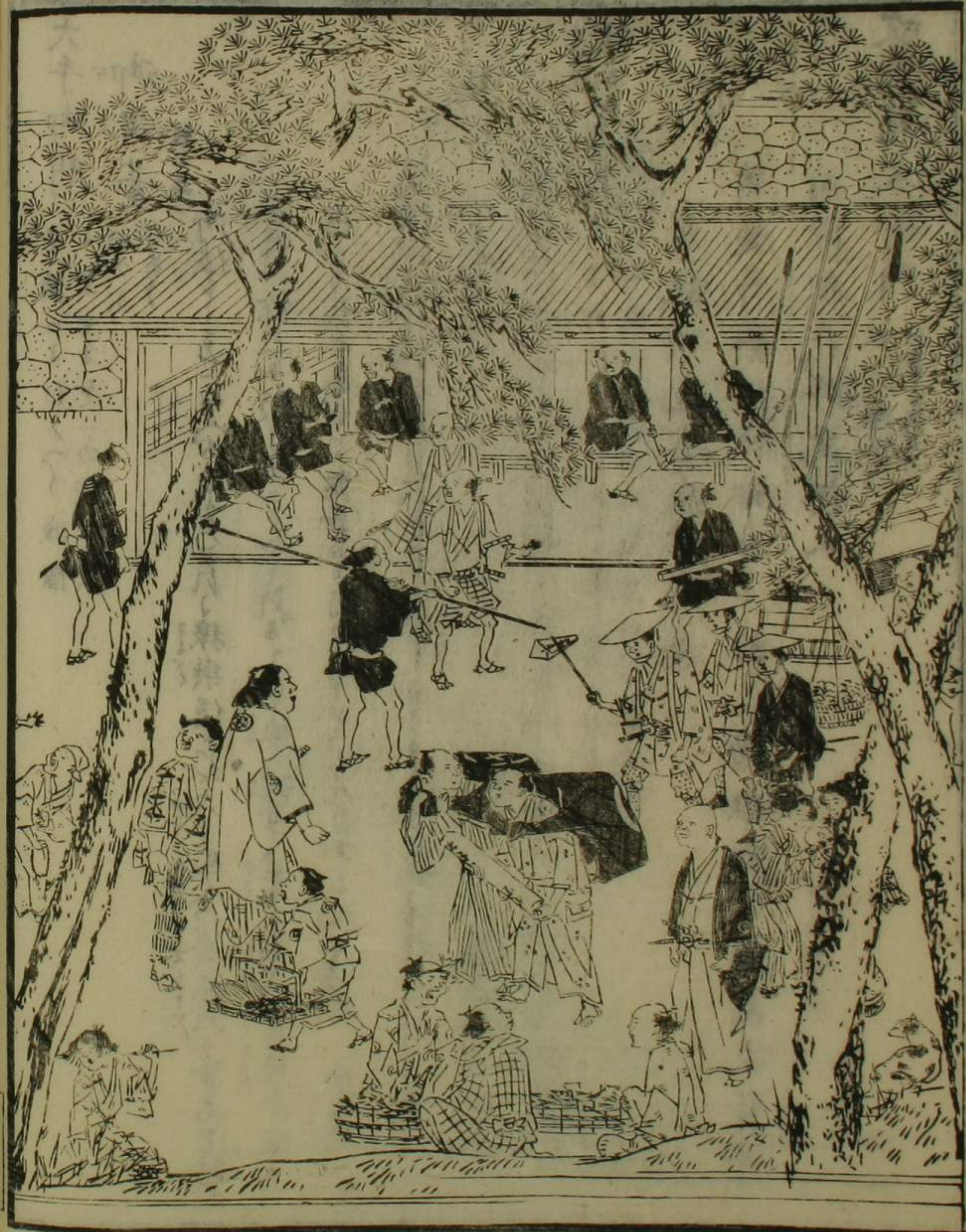
吹上御門 大手御門の西よあり是處は鷹の羽のうら  
 送の紋あり浅野氏領主の比れ余波亦也

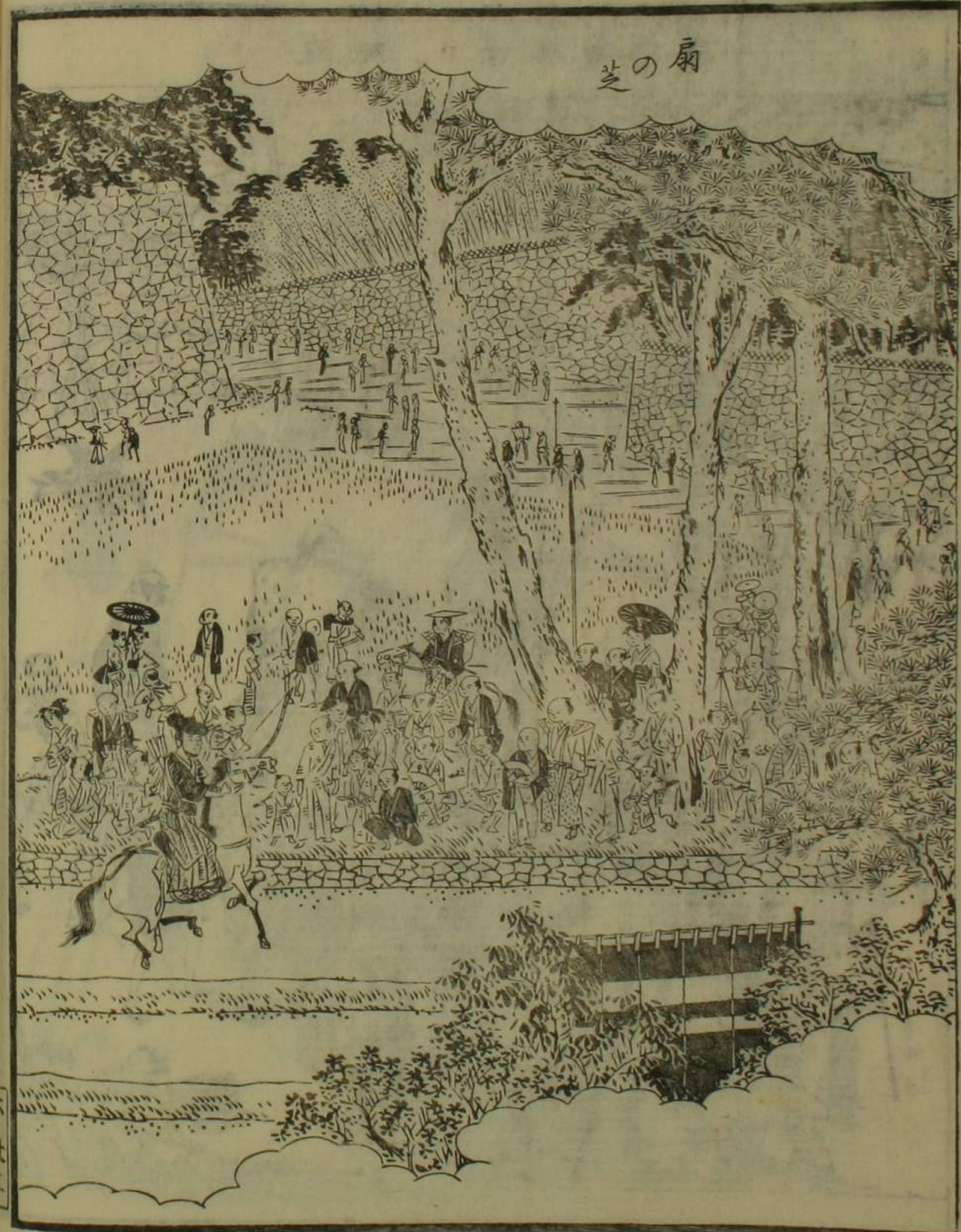
浅紀州 太守庭前芍薬

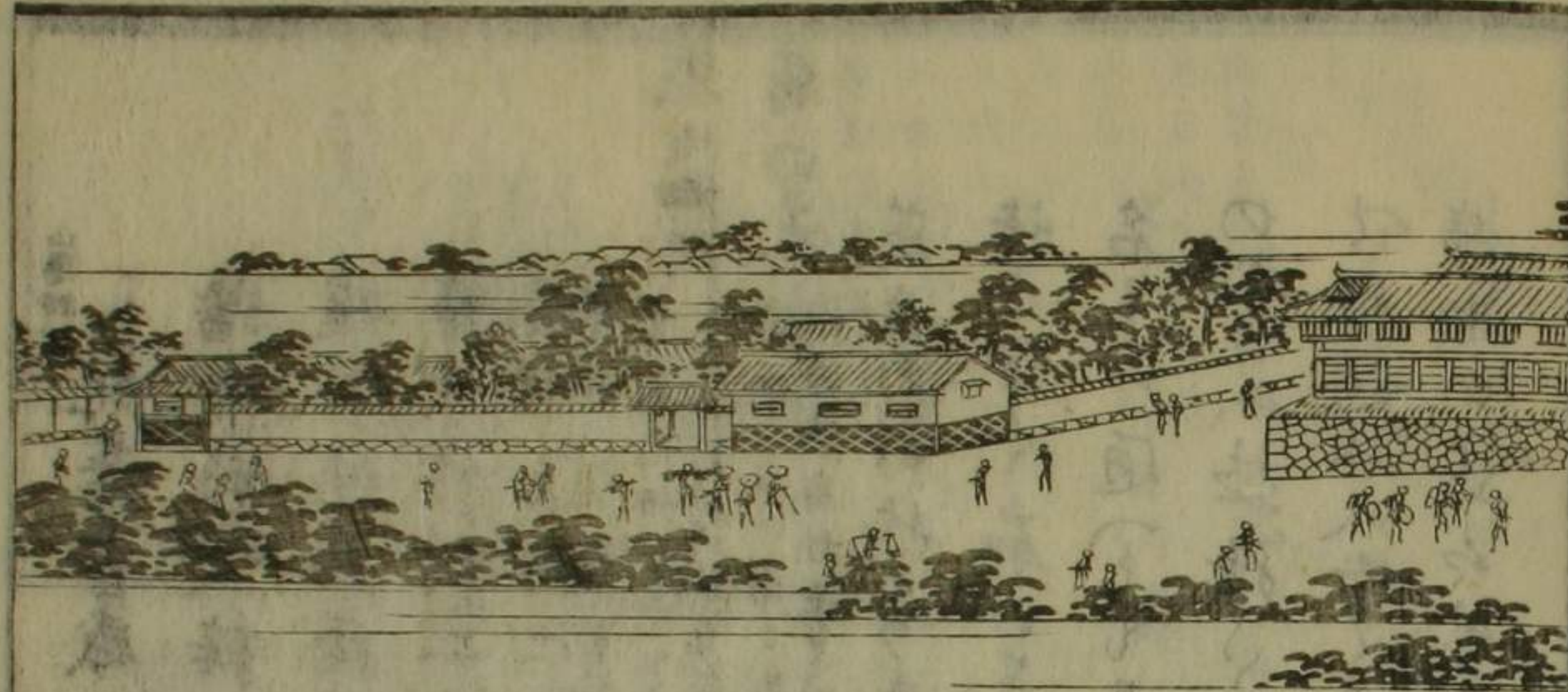
満庭芍薬絶比倫 白く紅く錯雜新亡頼 國家賢寄  
 相除斯花外更何人

吹上冠木御門 吹上御門  
吹上御門の東よあり

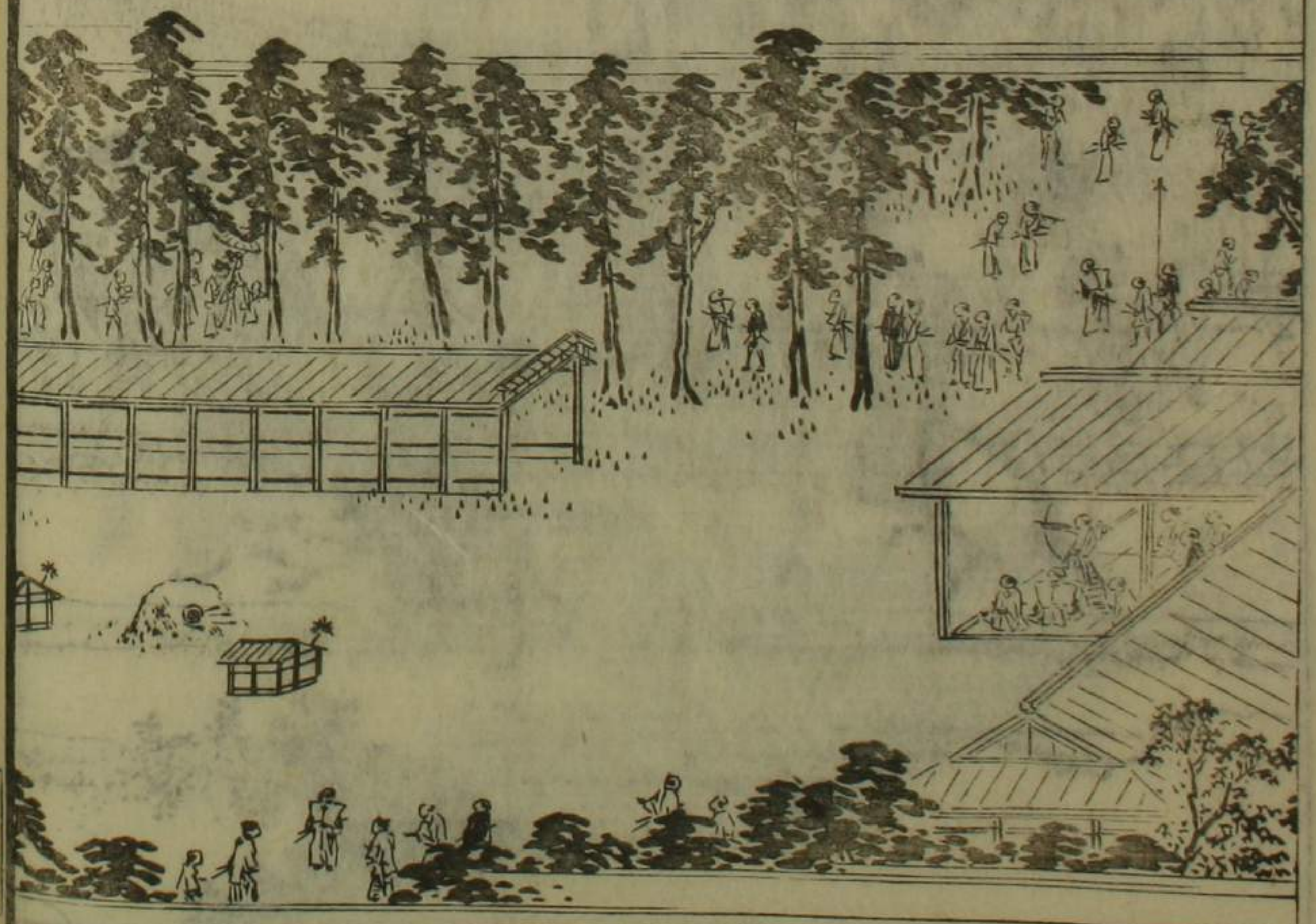
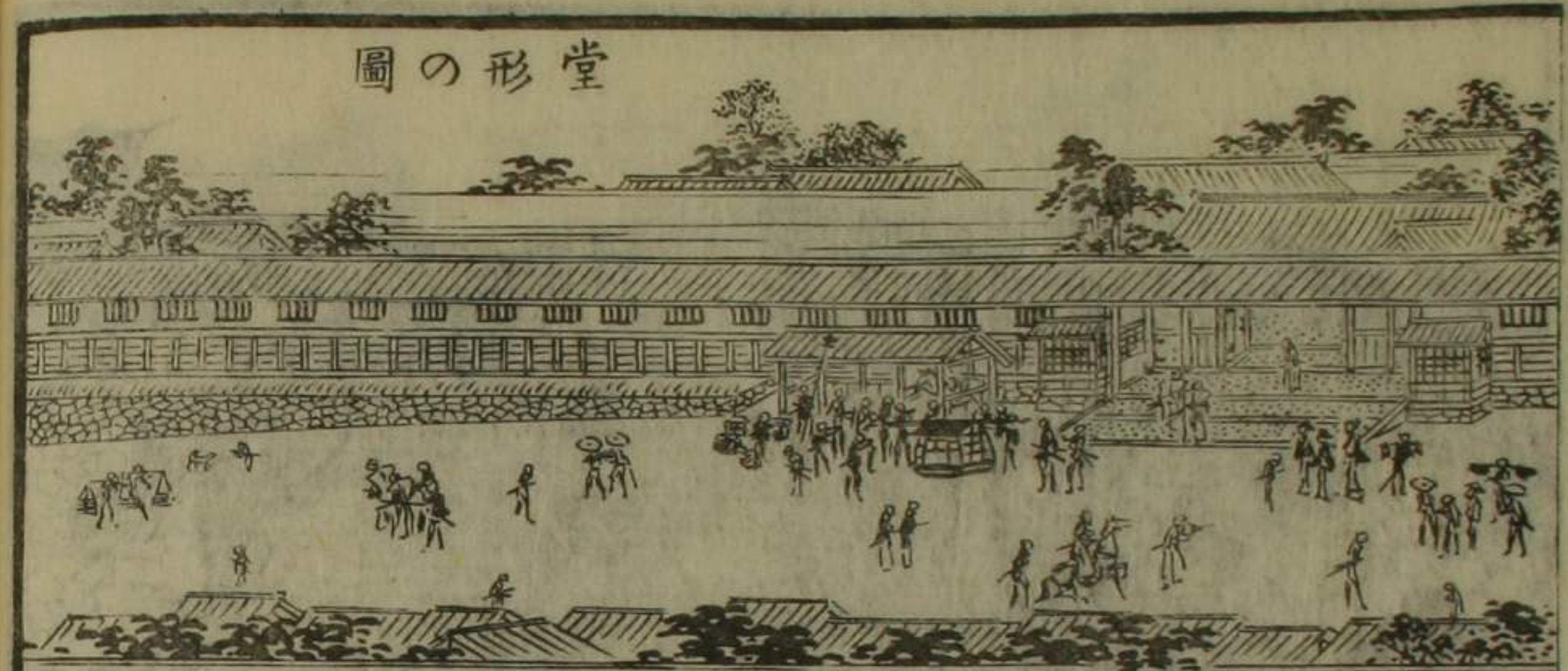
追廻 | 口邊往來の圖







堂形の圖





紀藩書感

頼襄

藩府形便接鎮臺吾公昔日剪蒿萊山分幾甸逶迤  
遠海擁西南濤洗開平蔡功勳憑胤武殪殷戈戟馘

廉來移封二百星霜變誰識孤臣頭數回紀与大坂

舊封元和之役歸順戰于榑井獲大坂驍  
將瑞丹輪等故頭聯云胤胤武用韓碑字

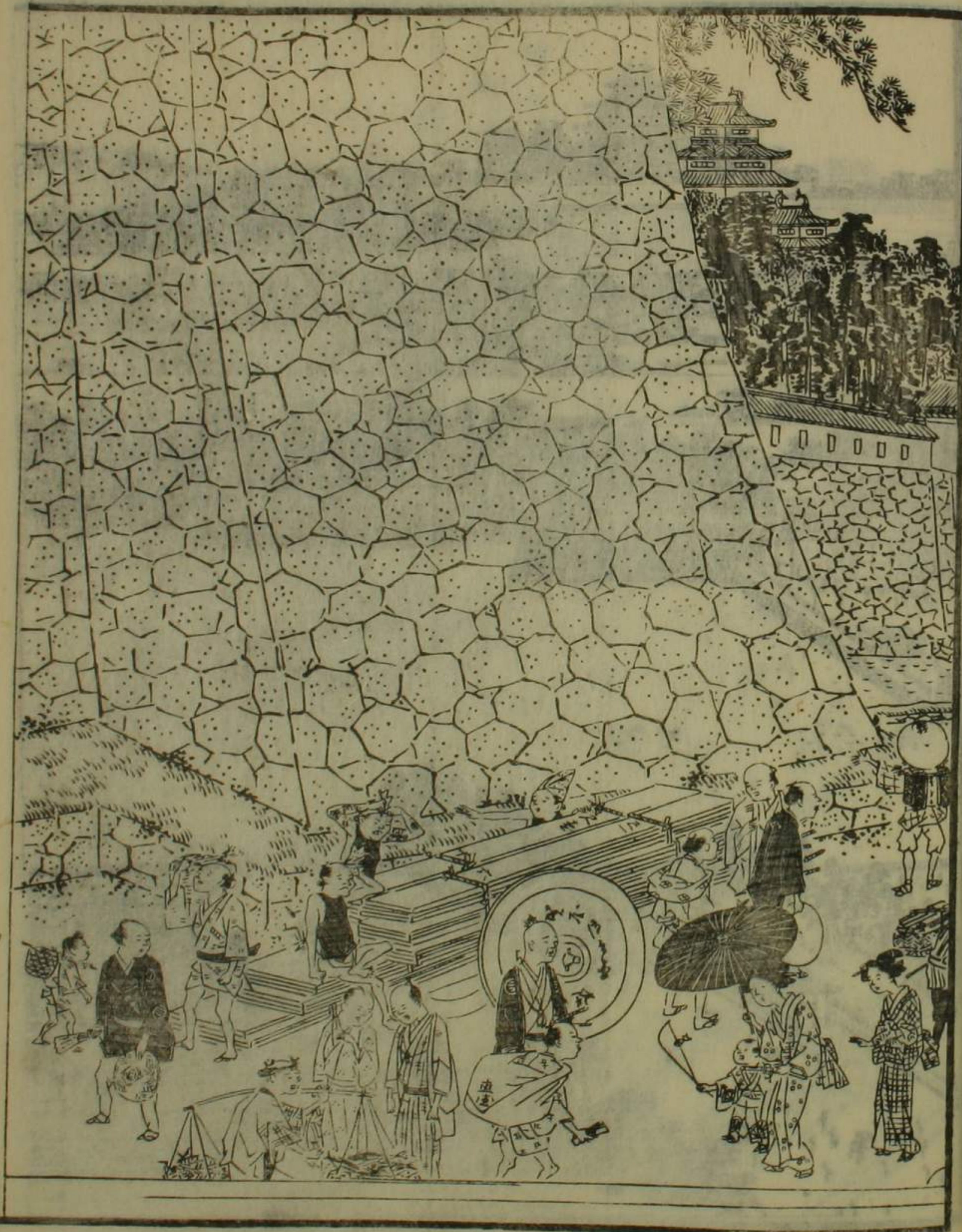
追廻御門府城西の西のあり傍小馬場  
あり馬を馳らす名とす

扇の芝追廻口の南あり  
此追廻名松原といふ

芝生の形北より東南へ廣く扇を開ききこんやうなれは  
流くるく扇の芝と呼ぶをこの山城北宇治よりありといふ  
名も相通へども是れを忘るべき路はいあらせてあせ要  
の松より極遠くは松の木本より道二筋より分れ廣瀬吹上  
と往通ふ人常は流るる上道の道は川原の真砂流らるに  
廣瀬の道は竹の林の蔭暗く芝生豊茂雨の降るころは

とや能く色まきしてはかろぬ地紙を張きあををいふ  
てく尺く遅くと和暖ゆる日近きあつりの寺部とも拓く  
とふく、空まの菓子氏食等をとり出く遊遊のよわれ  
を好し日の頃くををし知る傍林馬場を好くはれり  
糸すり、蹄は踏くは塵煙日く、塵とまはき霧とま  
のれりわきて騎射の日射る人の装もくわくされん人  
遠近より羣来て土手は雙松隙くぬるす立ちをあむてお  
のく心を馳せしめ

因よひ古の制諸國に軍團を建て各其地名を以て某の  
團といひて卷首に載せる天平北解文に軍團の輪天平元  
年定輪壹佰玖拾壹斛と見え即本國に團あり國の  
兵士弓馬便なるを騎兵の隊と余ハ兵の隊とい然る  
に其制後世廢きて本國に團と稱し地今知りては按る



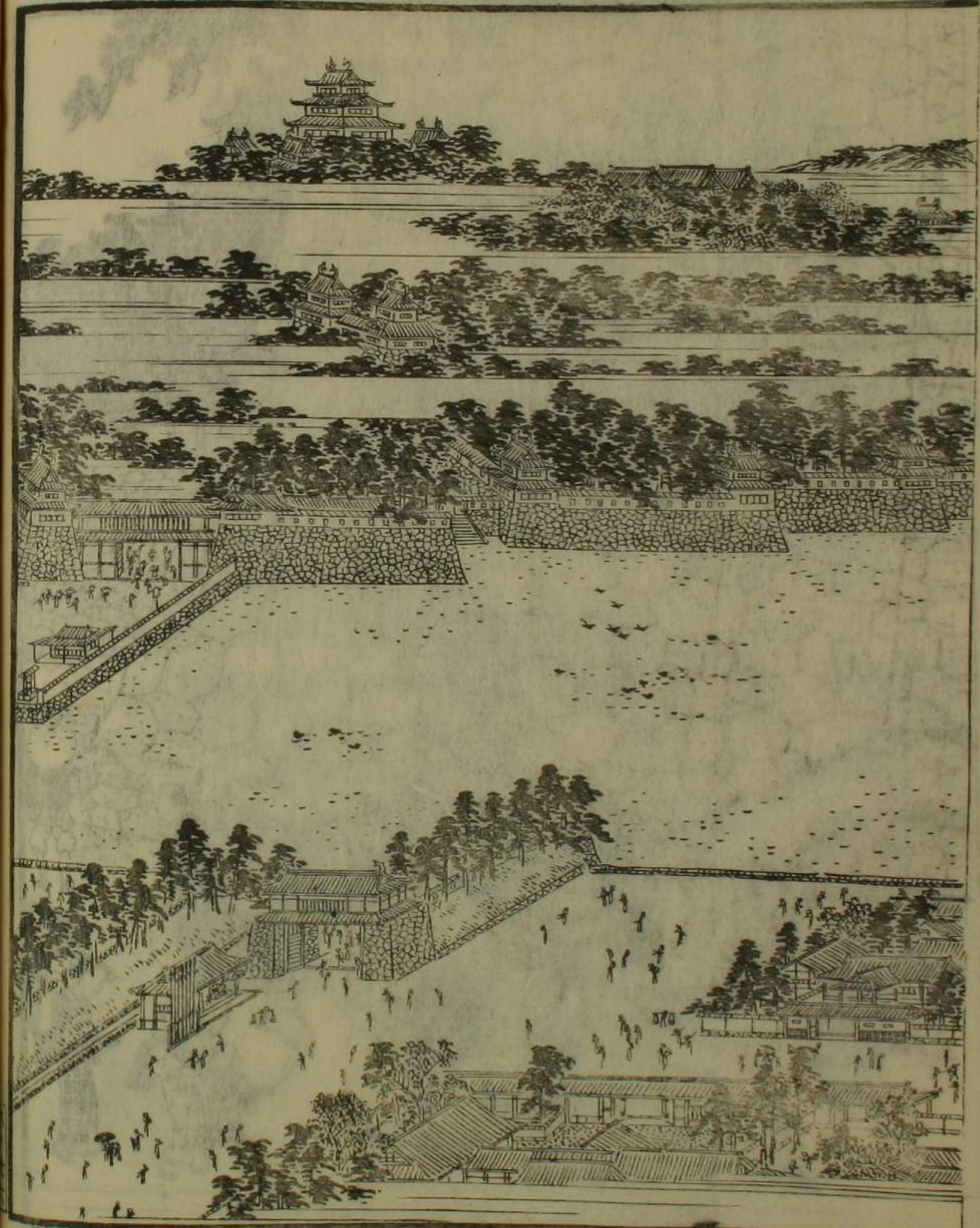
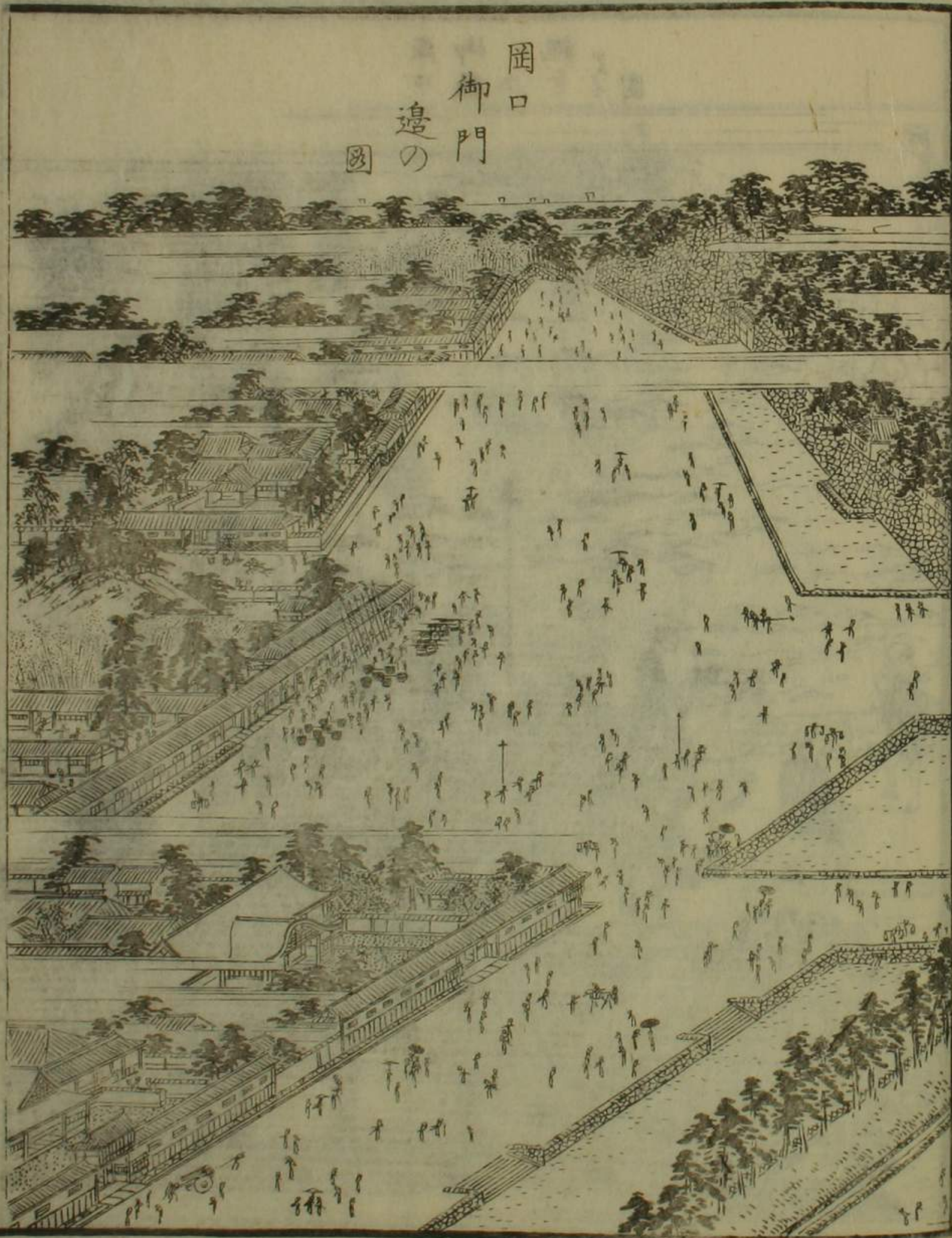
高石垣の畧圖

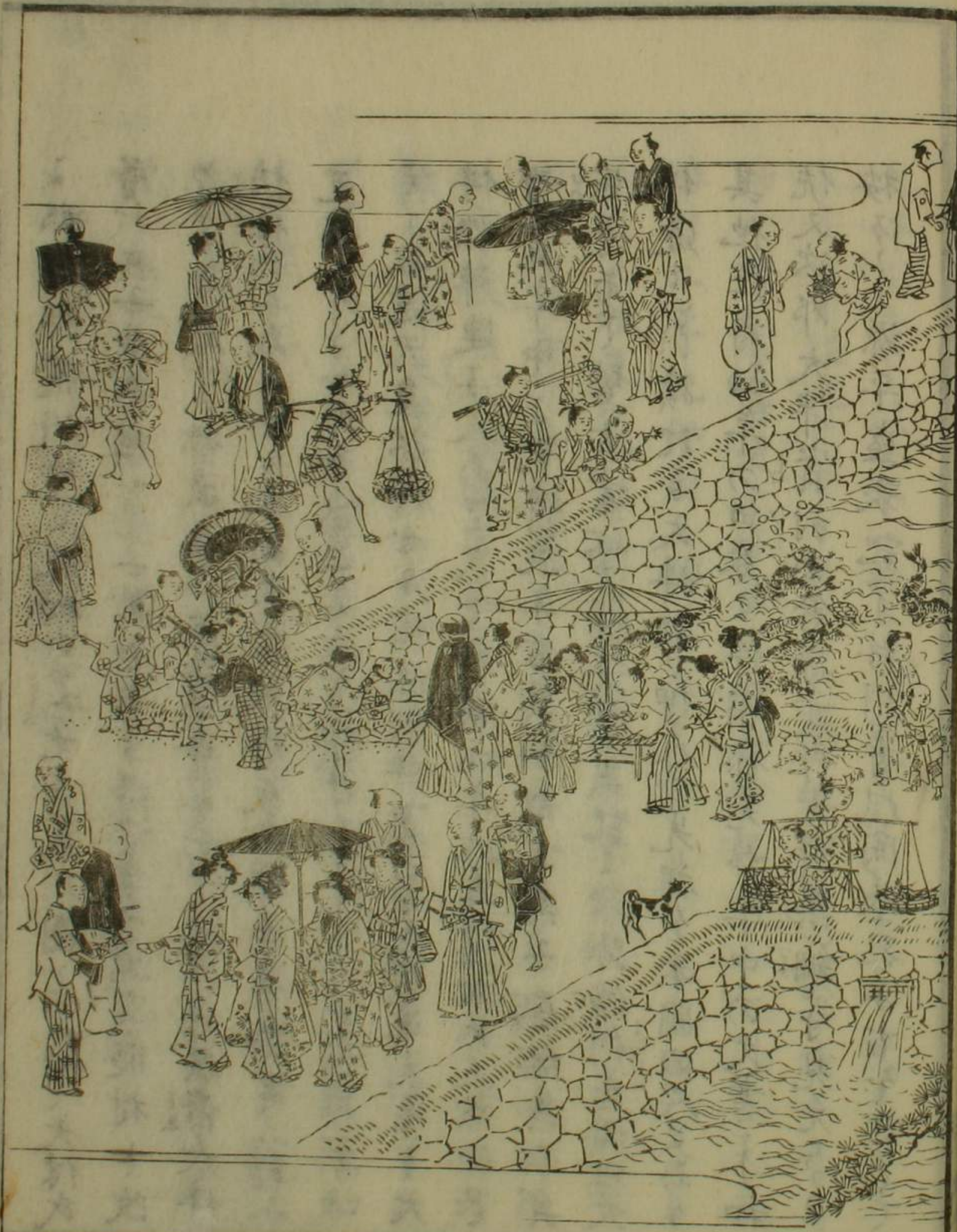
此の山は  
那支那竟門山  
と云ふなり

突兀閼闐氣勢雄  
鑿開超了五丁功  
風清壇埒朝調馬  
草綠平岡日試弓  
儀伏暗未松色際  
城樓影動水光中  
嚴障偏訝非人力  
祖業真忠名不空

無名氏

岡口  
御門  
邊の  
圖





固口  
御堀  
の  
鯉を  
見る  
園



那賀郡荒川郷に阪村あり是古荒川團といれて大伴氏  
等代兵士武を講ぎ一所なりし道音を以て阪村と改  
めしと云ふ一抄武事ハ天忍日命を以て始と云其裔大伴  
佐伯の二氏に分る本國上古大伴氏の後名草那賀二郡小  
充滿なりハ武事盛なり事初るなり其一二をい  
る敏達天皇於御世に宇治大伴連あり神龜元年大  
伴標津連子人あり天平神護元年大伴宿祢人成あり  
寶龜年中大伴孔子古其子船主其子益継其子貞  
宗等あり皆古書に及ゆ又雲異記沙弥信行を俗姓大  
伴連といひ續紀大伴部押人の先祖を本國の人とあり  
其他仁壽四年の田券に伴宿祢元弘年中の文書に和  
佐又次郎大伴實村小倉孫十郎大伴兼綱等見えたり  
按る源平盛衰記に粉川寺に開基孔子古を誤りて

大伴小手といふ小手ハ挾手彦の事をいへりて挾手彦ハ  
孔子古の祖先からより誤れるや或ハ佐手磨の誤り佐手磨ハ  
袖中抄に遣唐使大伴宿祢佐手磨記といふを引て天平  
勝實二年紀伊國に歸着しといへり是も亦本國の人なる  
なり又雄畧に伊世新羅征伐小大伴談連及紀崗前未  
目連力戦き事談載も崗前連ハ今名草郡岡崎郷の  
人が多しこれハ談連も本國より出り人なりやありん古本姓氏  
録に大伴大田宿祢ハ天押日命十一世孫談連之後也とい  
りて大田の名和名鈔名草郡の郷名なりこれハ本國の地名  
より起るなり氏なりと云ふは後世其裔種より別れ  
居所の名を以て苗字として本姓を忘る或ハ家系を失ひ或ハ  
漫り他姓を犯して遂に其祖先を知らざる多しなり

高石垣

内郭の西に築たる石垣高さ數十丈故に  
高石垣の名あり石垣の上古松繁茂なり

岡口御門 内郭東の入口なり

城池鯉

大城を遠まきる水玉松の緑を深りき長久は澄み汀もよめる  
 石ハ鮮滑うして紋おろ小く浪も静き當初往来の人と鯉能  
 ほへるを見て餌を與へしより漸く異の一隅小寄来る鯉年々  
 一救そのぬれハ何のはらり炙餅或も焦るる麦などをひき  
 ぐ者其傍よりうめなる店を構りり行客志ろく爰に休  
 ひて炙餅をえて水よ投まハ二三尺も餘れる鯉いかに見ても  
 びく群来て我劣らりと喰喝ハ或ハ潑刺もとら争りよを見て  
 戯とも丹生川は釜を沈めりめてこい此何泳の池乃故事と云  
 木ののこ 冷齋夜話小東坡詩我識南屏金鯽魚西湖  
 餘争侍盤投餅餌為  
 戲と尺くすもも何事と  
 和歌道 湊の東

南北へ過り府下より和歌浦に至る本道なれ名と云此鳥惣名  
 を吹よと云是より新堀を経て高松に至る此道ハ元和以後用  
 れ所として列松道を挟むる直道なり古道ハ是より西して地勢  
 大く變せり永兼三年関白頼通公高野參詣の歸路和歌浦遊  
 覽此記古道のほを初るもこれ因りてに哉と  
 前編より庵主記公任卿  
 家集の文りと併考す

十八日癸未天晴卯刻供御膳所々饗饌了令立

御宿給之間召國司定家 此人傳不詳名草郡藥勝寺より下せり治曆の官符小據るに

永兼二年本國の守り賜御馬一匹 毛 方棹華船迄于木

任ト同五年任を解り賜御馬一匹 毛 是行路之便為

御川尻令下給 川上より船より今ハ幡堤の上陸せり成り 是行路之便為

御覽吹上濱和歌浦也已刻之終着御湊口 此湊口と云今ハ大

抵今の宇治より湊 のほとりをいふなり 御馬并人々馬共遲將未間光景欲

頓極興難抑仍先召國司陪從近邊所在之馬各宛

騎用先御覽吹上濱朱紫比袖尊卑争行于時蒼海

渺邈晴砂崔嵬如登天山似向葱嶺 湊より今福村を過き西濱村関戸

村の更々をを通らせ給ふる如く此邊一面の砂濱にてちきハ山の如く卑きハ谷の如くかろし故如登天山似向葱嶺といへ夫より

高松のわづら 頃之経雜賀松原 公任卿集よりあり 令向

和詞浦給翠松傾盖白浪洗蹄 是和舟浦に至りて海辺の界あり松原を歴て茨辺

出らるる如く 飽地勢弥感土宜之稟天然猶指點吹上之濱和歌

浦雖山邊之說柿本之詞合此地亦難兵加之按轡

扣鞍爭拾色々具之輩已不別老若各任志之及乘

興之餘殆忘日暮 夫より濱邊にて貝あり拾ひ玉津島の方へ

未刻還御御船贊殿供御湯漬國司獻檜破子荷

御料次々皆 申刻於木濱御御馬自笠道山令通給 御

以色紙付標 船とハ紀川を渡り給ふる木濱ハ今の栗谷のありをのよかふ

色一笠道山より令通給あり 貴志栗谷と葛城山の麓にて海

里宮山無量光寺 大恩寺の東あり 山中秉燭海濱伴月

文政十二年徳本行者の徒弟官許を得て造立も行者を

推して當寺の開基と末寺五箇寺を附も堂宇尤壯麗

りて參詣多一日々專念此念佛懈なり

車坂稻荷社 大智寺境内 鎮坐の時歴詳なら

願成就も及て必朱鳥居を建りて故社頭にて一

二丁の間幾筋ともなく大小数千基を列せし松林中

常小紅葉を觀るのこぞ

登大智寺山即更 竹村菽渚

雨餘邱景遠含煙境近吹濱物色鮮 磴脚竹陰透日淨

幽夢避塵無一事掬出半天月 蟬娟見左右映田接戸連

和泉國孝子こえられ 是古の本道あり

和泉國孝子こえられ是古の本道あり

山中秉燭海濱伴月

里宮山無量光寺

文政十二年徳本行者の徒弟官許を得て造立も行者を推して當寺の開基と末寺五箇寺を附も堂宇尤壯麗りて參詣多一日々專念此念佛懈なり

淺草文庫印

辨疑書目錄金澤文庫并足利學校の事を記せる條下は山口本と  
江戸淺草の別荘に畜する羣書に押せる印ありて既丹波元簡の醫板板下齋の祖  
手鈔鍼灸聚芳四卷有那波道圓及陳元寶跋皆真蹟卷末有淺草文庫印記下齋名如香  
世為名醫好畜書居於淺草寺之北明曆元年十一月卒墓在竹門醫王院林學士信篤銘  
とあり今家藏の書籍に押ししるを摹寫して好古の人より示以如春著書の中家傳ふ  
その鍼灸資生經馬本道春學士の跋あり又關原日記あり此書のこと既録屋翁の玉勝  
同し見せり又宋板の編年互見圖後園鞆院天皇永和二年に翻刻せし書偶遺るを得  
て再板せし此板今亡しり卷末に道慶真榮寺の跋あり

鍼灸聚芳跋

嘗觀人之生也以水土之失宜則疾病因焉古之  
聖人既歿草木之凋謝之矣然又以為草木之  
金火之功速也此鍼灸之書所錄也茲有鍼灸  
二書流傳於世以久矣儒醫之極也茲有  
珍其傳焉倘亦以久矣儒醫之極也茲有  
痲瘋者手不侵偶以金火之極也茲有  
尤以旌音翁力古之功明崇禎戊寅孟秋  
虎林元贊謹題  
曆代帝王編年互見之圖跋  
璞以十而出劍自雷而顯一物且然况乎帝係者乎  
年之成於行齋犬人者豈偶梓者二百餘祀兵世遠人  
虎其編集刊行焉然於一篇幸存於禪室其字彙者什一  
亡其極即泯焉而於一日幸存於禪室其字彙者什一  
是犬人即泯焉而於一日幸存於禪室其字彙者什一  
費俸刊即泯焉而於一日幸存於禪室其字彙者什一  
之至者也走幸蒙犬人柔遠之仁寒暑而賜藜藿疾

而鎖樂餌以保殘命矣今也投我以一篇其簡粲々其  
墨淋々某王之興廢某代之盛衰如見目今然則父  
非起躋壽域於春臺抑亦植網紀於茲世也君臣父  
鑑此圖而懲感儒士釋氏覽茲書而多識豈玉道相  
比哉且道慶鴻儒素結膠漆又得醫術忠告善道相  
輔也人豈圖所敢應請為跋乃鳳麟趾金聲玉振者  
也文人之於直諫卷斷金真蘭雲足察理自診察至  
諷卷天性剛直所好也審矣  
終汚不至阿其所好也審矣  
寬承己巳陽月上旬朝蘇國江陽君苗裔 李真榮謹書于紀州

淺草文庫



日前宮除夜參詣

廣瀬大橋より言よて  
行程九十二丁より

府下の俗除夜は癩除或は祈願あふ者裸體跣足よく腰下に  
志米繩を結ひ手より一刀を携へく神社へ詣りるを裸赤といふ  
日前宮を近郷へ坐して尊敬他と異なり詣りる者夥し廣



瀬の大橋其次に架れを以て町々の者西より南より出あひて  
羣聚をせし寒風を凌ぎ競ひ走れし音格過る等紀  
て雷の轟くこと

泰詣の儀志未繩をききて  
社頭杖掛くことあり  
因し日前國懸兩大神宮の御鎮坐寺の事前篇誤多く先輩の説も區々なれと  
釋日本紀に引る大倭本紀の傳正しく開ゆき今此のせく國造家曆應比  
欽状と合を考へ  
そふ大畧を示は

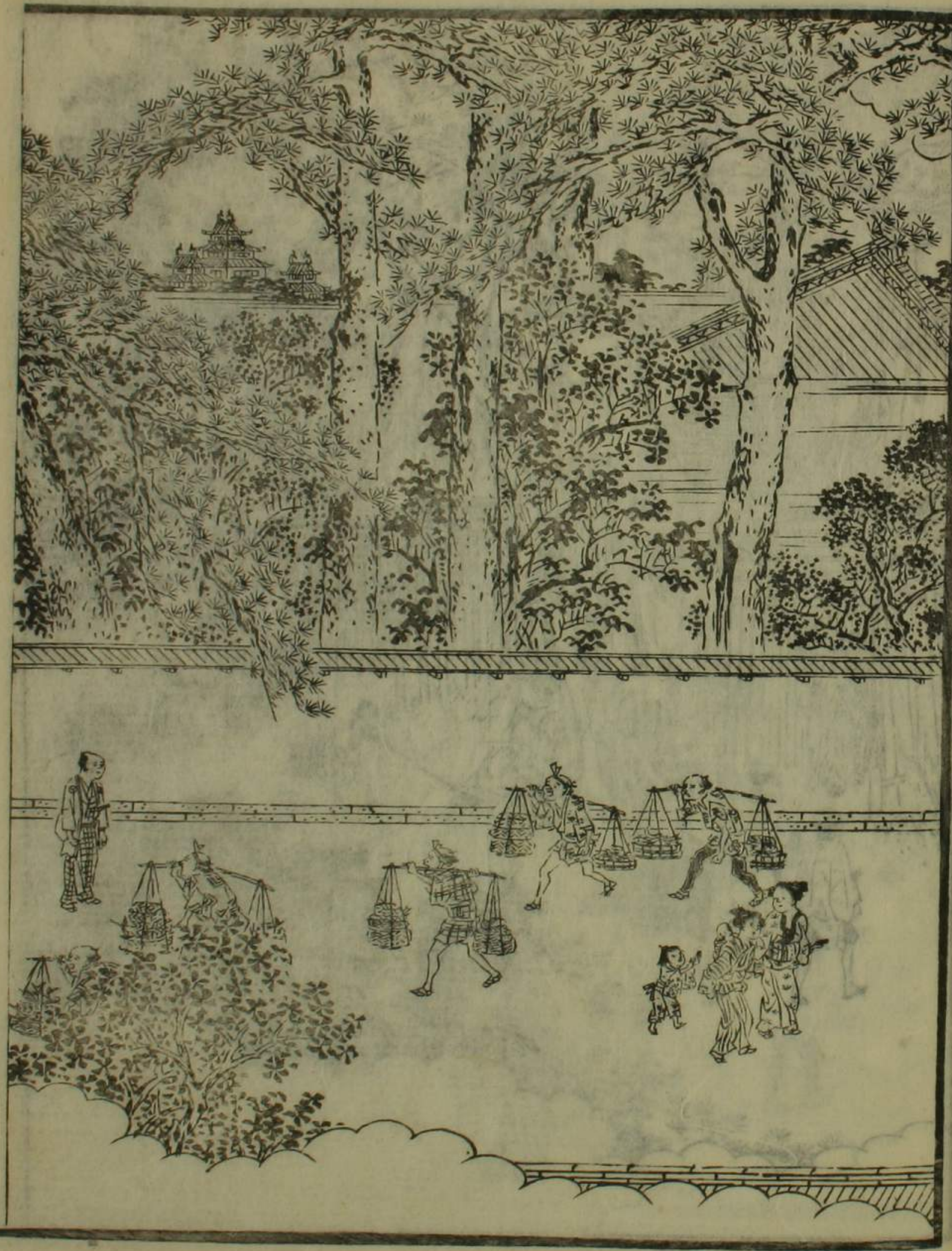
一書曰天皇之始命天降來之時共副護齋  
鏡三面子鈴一合也

本書註云一鏡者天照大神之御靈名天懸大神  
也日前宮御一鏡者天照大神之前御靈名國懸  
大神國懸宮御靈實日身是也日身を直し鏡  
合意とあり内裏賢所に坐す今紀伊國名草宮  
御鏡なり故あふ事なり今紀伊國名草宮  
崇敬解祭大神也今兩宮一鏡及子鈴者天皇御  
食津神朝夕御食夜護日護齋奉大神今卷向穴

師社官所坐解祭大神也寬永雜記に及く國造家  
齋牙と申せ  
る稱ありとありハ天懸國懸と對て稱奉れる御名

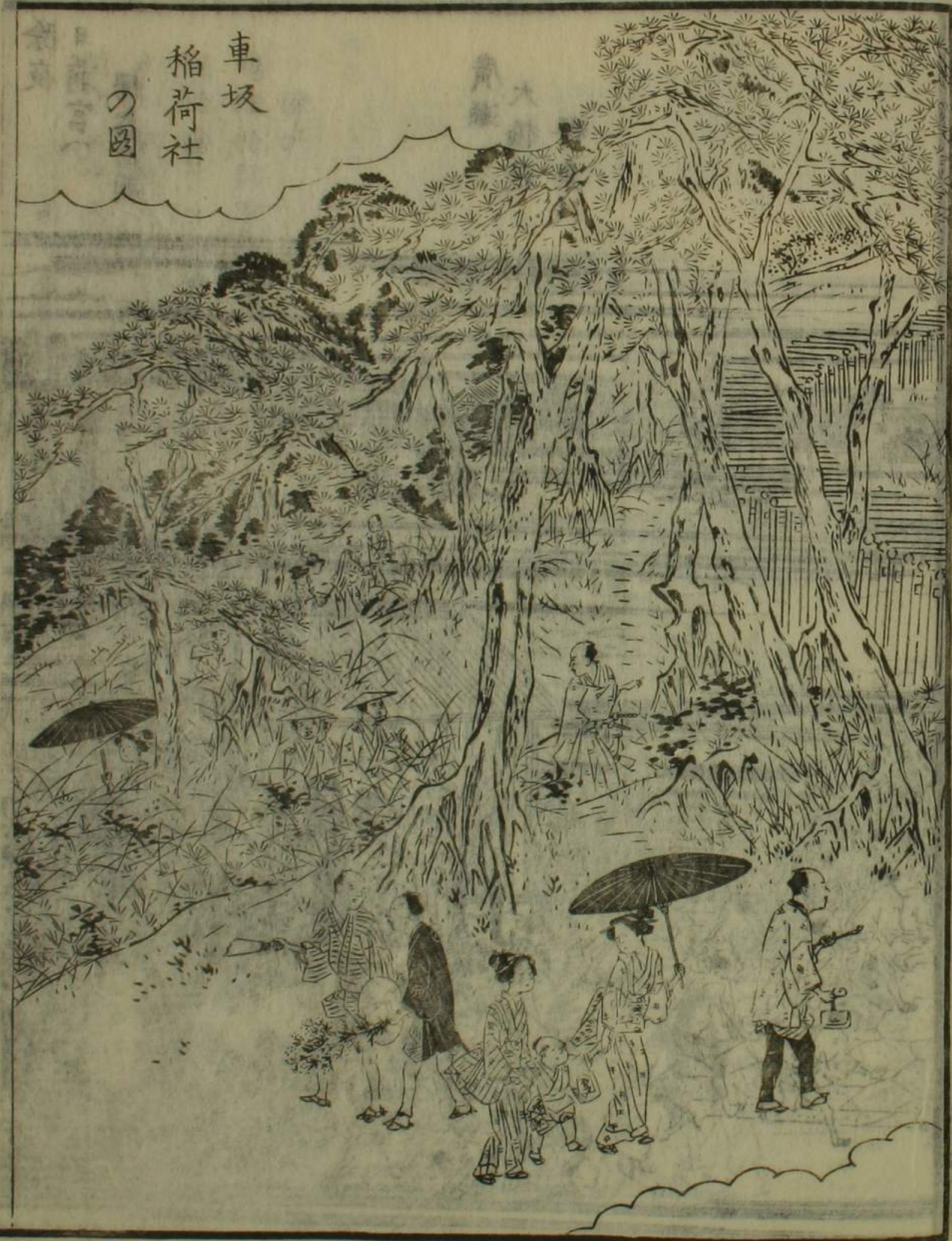
なり然ふを天懸大神ハ地名の日前ひのくさを以くとすハ  
日前國懸兩大神の称起りより天懸大神の御名と  
知る人なくある所なる後世日前宮と稱奉り  
て國懸宮をも兼ふる稱となすも古に遺稱

又國造家傳とれふ曆應三年に欽状の草案  
に謹考固實日前國懸之兩宮者天照皇神之前靈  
也和光早卜南海之月崇敬年舊尊貌亦留北闕之  
雲靈驗日新とすれハ兩宮とも天照大御神ハ  
幸靈とありハ事知る處一此文を證として  
一鏡者天照大神之御靈とありも前の字を補ふ  
ハヤ考ふハ



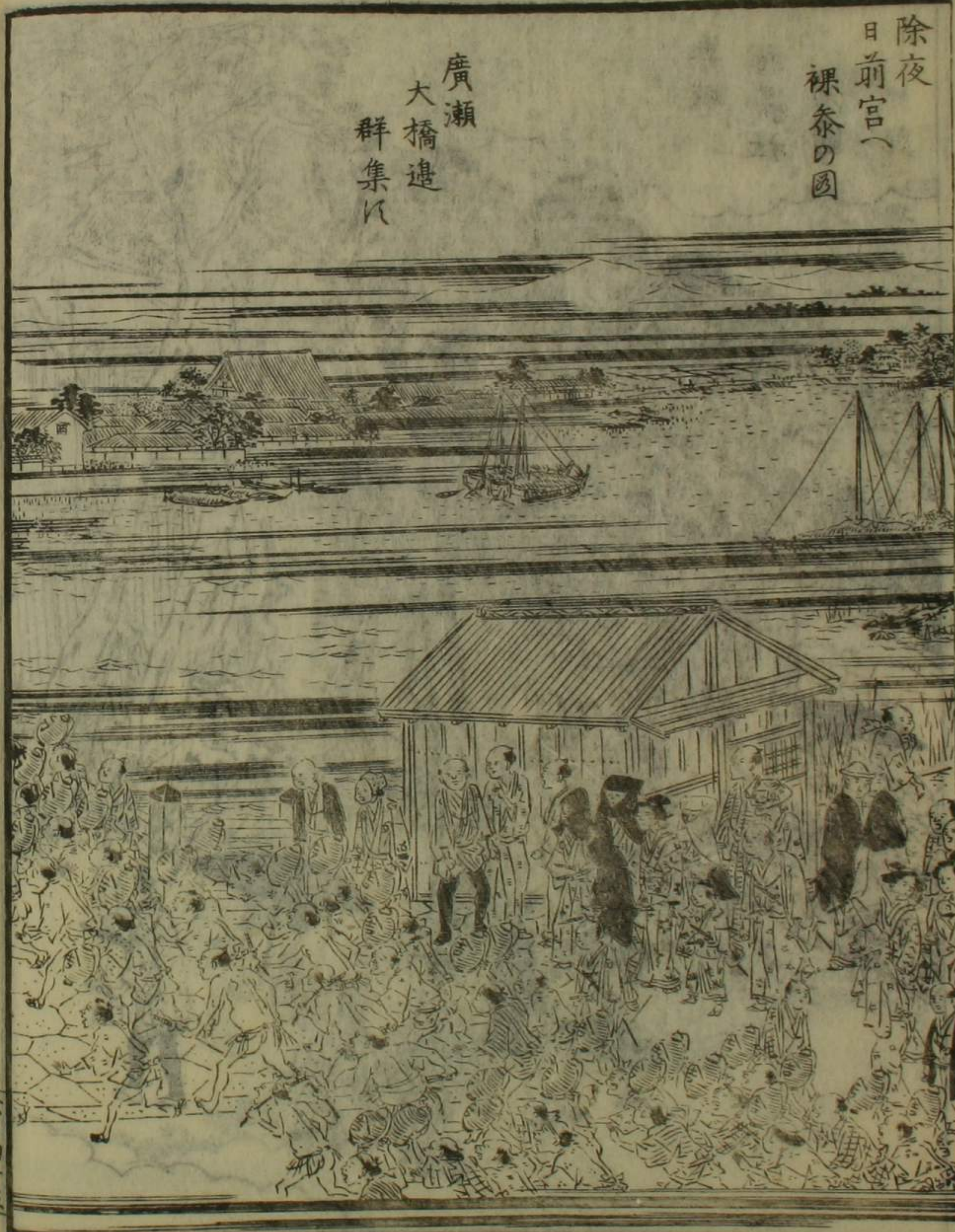
和歌道  
御城を  
望む圖

車坂  
稻荷社  
の圖



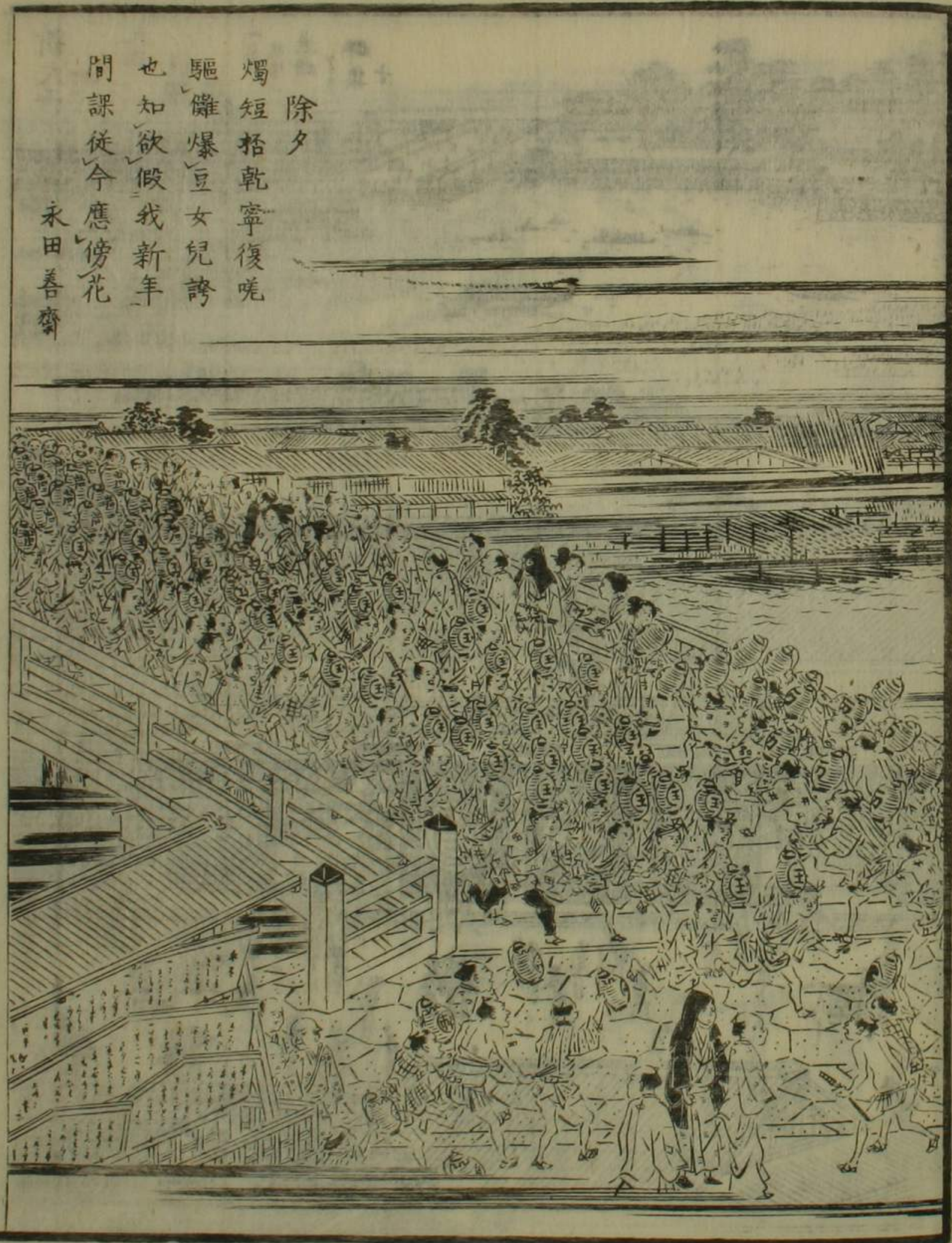
除夜  
日前宮  
裸参の圖

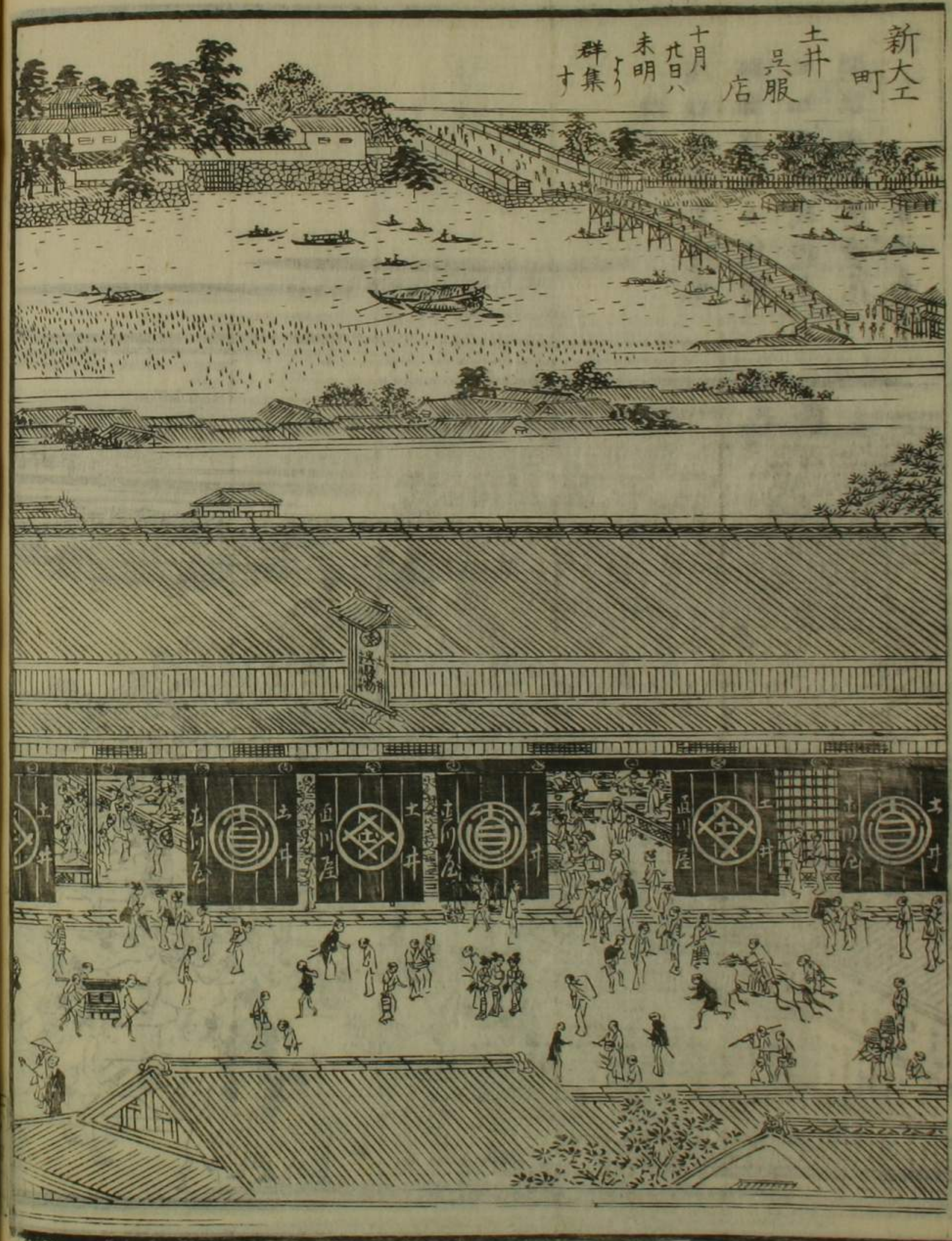
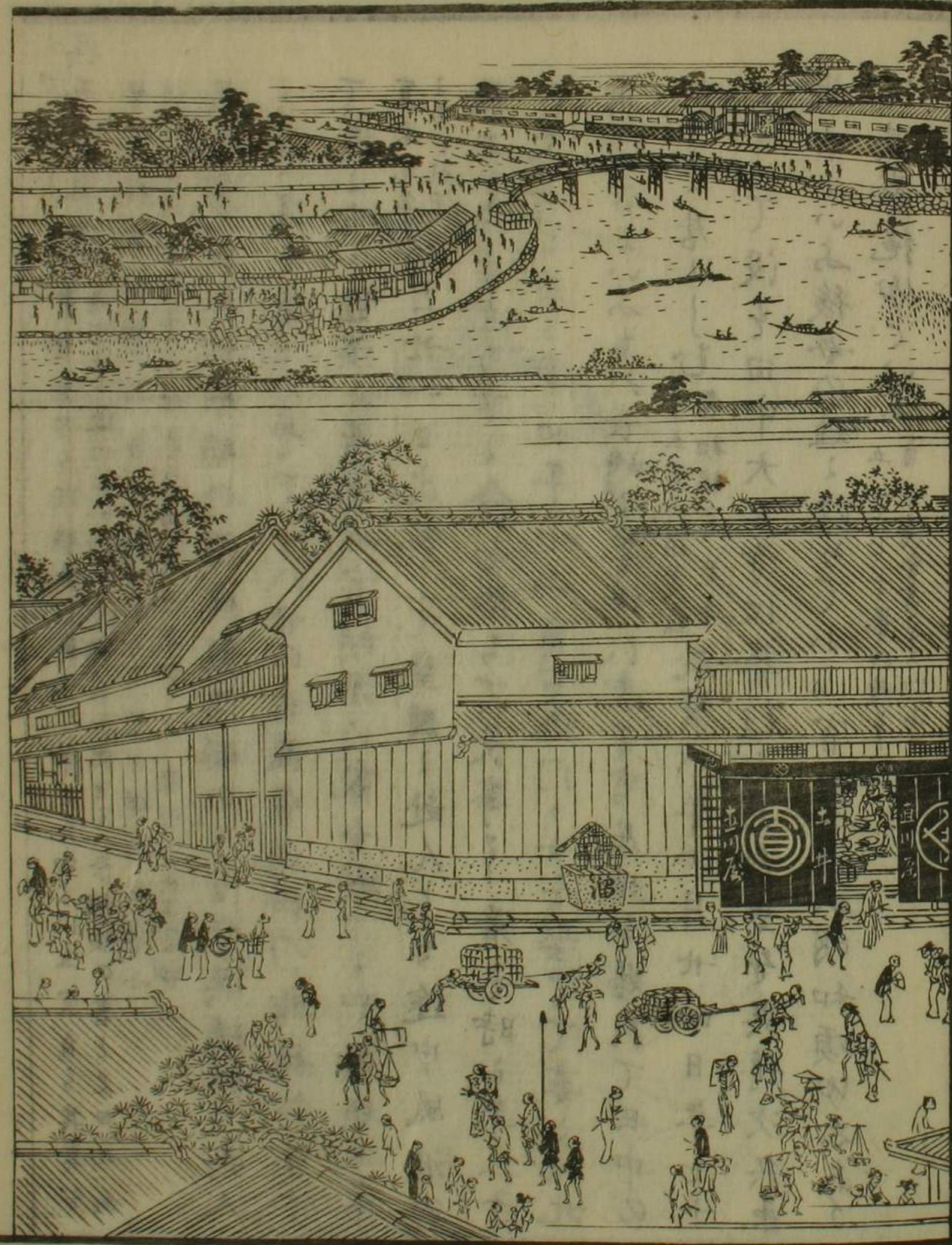
廣瀬  
大橋邊  
群集以



除夕  
燭短拾乾寧復曉  
驅離爆豆女兒誇  
也知欲假我新年  
間課從今應傍花

永田善齋



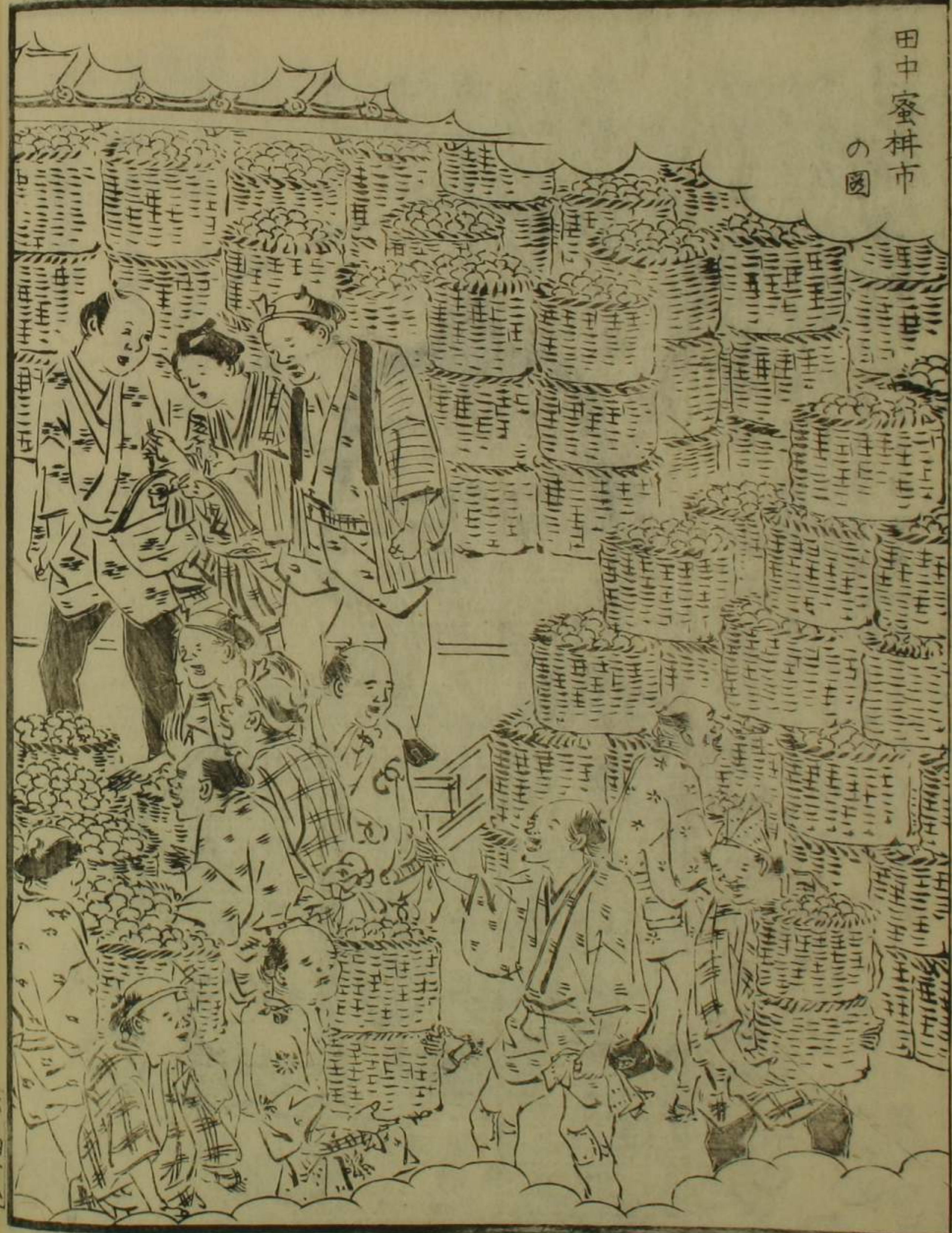


吳五官肖像 筆者詳なりけ明画の辨して筆力丸ありけ五官自ら其真を寫せるの像の上は生年ハ概畧を記せるハ李梅溪の書と尺也此画像舊旣取村惣持寺より傳へし五官の碑大立寺小在るを以て同寺に贈きて其事はさしづゝ像の下文も尺也

吳五官名を任顯明の福建龍溪縣の人なり其遠祖ハ吳人として名を真といふ也十八世の祖隨帝南征の時從ひ来りて遂に世々龍溪に居る五官明末の亂を避るるや崇禎五年寛永九年六月廿一日出帆して皇國に赴んとし途巾風波の難ありしとも幸に命を保ちて長寄り着し時年二十七長崎に居る幸四年小山角右衛門の女を娶りて妻と城北角清吉といふ也長崎より伴ひ来り官居地を賜ひて田中の園子に居るしむ今五官小路といふ畧初編より尺也延寶六年正月廿四日年七十三して没む田中大立寺に葬むる其長男を吳傳次共糸通古といふ後母の姓に改めて小山官記といふ明和頃ゆゑありて其家絶ゆといふ

五官七十歳の時より自小便を書きたる物あり





田中市 廣瀬大橋より東に達する町あり旧田疇の中、町家を建しより

類珠に多し蜜柑ハ本国の名産にて  
他は比類なり詳し在田郡の條にふりて

熊野路一里塚 橋向町より南に達するを以屋町とす町の南端にあり府

あり一里富町を築  
きて後くうりてす

本宮まで路程并驛所

若山 一里半 内原 二里 加茂谷 一里半 宮原 一里半 湯淺 一里

井関 二里 原谷 二里 小松原 三里 印南 三里 南部 二里

田邊 二里 三栖 二里 十五丁 芝 二十四丁 高原 二里 十二丁 辻露 二十九丁

野中 四里 伏拜 一里 本宮 以上驛路を中邊地といふ其中間  
田邊より分きて海濱の方よりゆく

を大邊地といふ詳し田邊  
城下の條に記を也

紀伊國名所圖會後編卷一終



